Liarsoftの嘘つきエンターテイメントマガジン

cover model=久秀&平グモちゃん、リリィ&バラの魔女、サチさん
photo=忌野Lem

Quarterly
400 ニコル（税込）

USO 月刊うそ。

Volume. 42



スチームパンクシリーズ最新作

~ What a shining braves ~
—Brightness, the thing of which it thinks much. —What who envies
—However, nobody's fingertip had touched it until now.

黄雷のガクトゥーン

スチームパンク
ポータルサイト
展開中！
steampunkseries.com

ライアー遂にコミケに進出！コミケ販売グッズ通販開始！/B.G.M Fesでボクと握手！/
今日のお天気は晴れ、所により久秀爆発/阿野藤モデルメガネ近日発売!?/幻の酒、紅酒の抽選販売開始！
「牧師に学ぶ正しい土下座」車掌Aの場合/結奈の夏バテ防止料理の作り方「もう秋じゃないかな…」

INDEX

SEASONLY LIARMARU

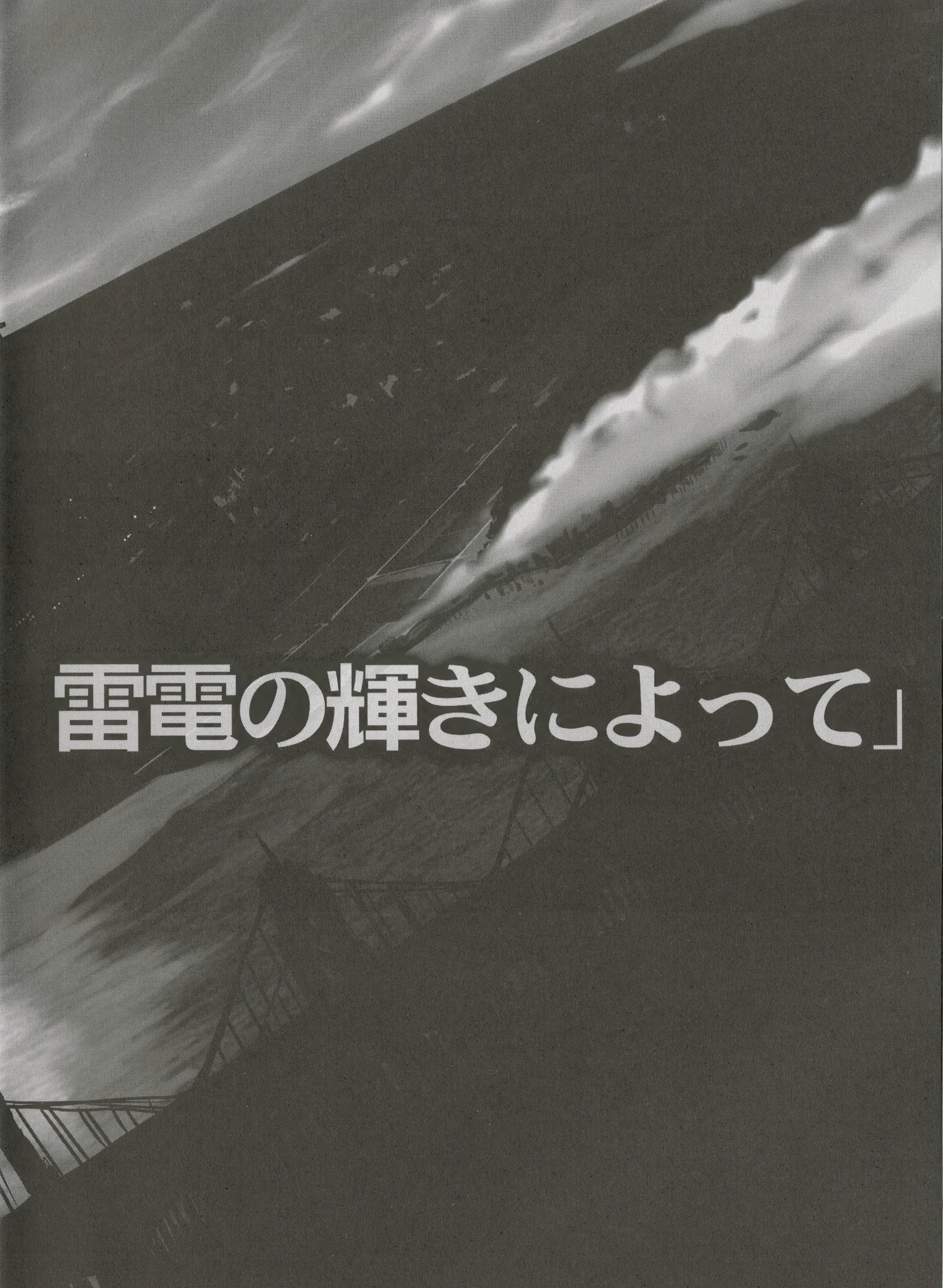
今号の「紅殻町博物誌」「絶対地球防衛機メガラフター」はお休みいたします。
「読者参加企画」は連載を休止、今後ＷＥＢコンテンツとして再始動予定です。

COVERGIRL
因幡（いなば）うさぎーず



いべんとらーっしゅ！／いべんとらーーっしゅ！！／ライアーさん猛攻ターンです！／どうしたん？／どうしたとか言うな／あれだな今でネトゲ中毒だった子供が進学して急にアウトドア派になったみたいな／的確だけど厭なたとえだ…／なんにせよ楽しんでいただけるようお客様第一で頑張りマース！／マース！


「歓喜の時は来る。
今、ここで。


雷電の輝きによって」

――輝き、尊ばれるもの。

――誰も彼もが羨むもの。

――けれど、それは、これまで誰の指先も触れたことがなかった。



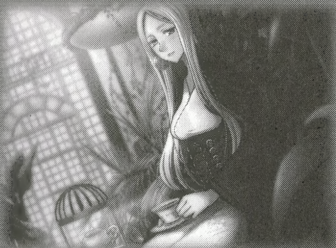
20世紀初頭。欧州、マルセイユの洋上に厳然と聳える学園都市があった。

先端的機関科学に基づいて形作られた都市、世界最高の碩学を生み出すための学園。
華やかなる蒸気文明によって汚染された海の上にあって、汚染された空の下にあって、
けれどもそこは、青春を謳歌する若者たちの輝きで満ちていた。

失われた太陽を思わせる活力と熱意に溢れて。

失われた星々を思わせる美しさを煌めかせて。







けれど、学園都市には、フランス政府さえ恐れるひとつの秘密があった。すなわち、
学園は欧州全土の闇を統べる秘密結社《西インド会社》の支配下にあるという事実。
欧州のどんな国家組織でさえ学園都市の全貌を明らかにはできず、介入は許されず、
各国首脳はただ密かに静かにその動向を見つめるしかない。

けれども、1908年。

ひとりの《転校生》が学園を訪れる時、
予言された歓喜の時を告げる《ガクトゥーンの鐘》が鳴り響いて――

~ What a shinning braves ~
—Brightness, the thing of which it thinks much. —What who envies
—However, nobody's fingertip had touched it until now.

黄雷のガクトゥーン

企画・シナリオ・総監督：桜井 光

原画・キャラクターデザイン：千枚葉

主題歌・エンディングテーマ：Rita

音楽：Blueberry&Yogurt／マッツミュージックスタジオ

日本語版WINDOWSXP対応DVD-ROM／フルボイス

2012年12月21日発売予定

「オリジナルサウンドトラック」「設定資料冊子」同梱初回版　9,800円＋税
予約特典「ガクトゥーンドラマ&アクセサリーボイスCD“男の子用”“女の子用”」

※通常版の発売は2013年1月以降となります。特典詳細・店舗特典情報はWEBをご確認ください。



秋と言えば旅行です！
今日はとある旧市街に
やってきました!!
■三題噺とは■　皆さんに一個ずつお題を頂いて、割合と頭のよろしくない
お話をでっち上げようと言う試みです。お一人ひとつ頂けると幸いです。
旅行するの
久しぶりね
そうだな…
ここんとこ
真面目に
働かされたし
※旅行代が無かったからです。
SEVEN-BRIDGE
エーマッ！
わわ!?
ぴょん
どしたの
そのかっこーっ
かわい―!!
うむっ
ちょっと
バイトでな！
ぴょん
ぴょんっ
そしてお店は今
オクトーバーフェストの
用意で大忙しである！
な!?
お祭では 旅の男性に
大事な役割が！
ささ飲んで
食べてッ
マジか！
さて エマちゃんも
着替えましょねー
え？
大丈夫だからー
こわくない
ですよぅー



前回はお休みして済みませんでした。てなわけで今回は二回分頂いたネタから「衣替え(しのさん)」+「オクトパス(猫井篤さん)」+「酔っ払い(ニコさん)」でした。オクトーバーフェストとかビールが来るかと思いきや意外な伏兵が・・・。ドラゴンステーキ!(エンターブレイン刊)もよろしくお願いします!!(宣伝)



ろりVS巨乳

勇気「ども、ラブネゴのヒロイン、岡田勇気です。このページはろり陣営、きょにう陣営、そしてスレンダー陣営に別れて、それぞれの陣営が持つ素晴らしい部分をテーマに沿ってディスカッションしていく、業の深いコーナーです。ろり陣営は、あたし、岡田勇気！」
モコ「きょにう陣営はピンクパンツァーのモコ」
ノブ「スレンダーは水スペの川野ノブでお送りします！　で、今回のテーマは『食事』！」

▼ろり陣営お便り紹介

勇気「はい、では、はじめはろり陣営！　解説はいつものこの人……」
将太郎「ダンディズム溢れるロリータコンプレックス、高将太郎だ」
勇気「……　さっさと皆さんのお便りを紹介していきますねっ」

「ろりっ娘の食事といえば哺乳瓶が浮かびます。健康的なろりっ娘の育成はまずミルクから！」　（PN：カナエ一号　さん）

将太郎「うむ、授乳最高！」
勇気「ちょ！　健康的な投稿が、いきなり不健康になっちゃったでしょうが！」
将太郎「だがこんな投稿もあるぞ？」

「昼下がりの砂場。今日もそこには三人の幼女が。（以下仮名）『ただいまー』『あらパパおかえりなさい。ご飯にしますか？おふろにしますか？』『ねなもうねるー』『あらあらパパはしょうがないわね。じゃあささちゃん二人でご飯にしましょうか』『どろのお団子なんて食べられないよ～』『赤ちゃんがしゃべっちゃ駄目！』『赤ちゃんならうみちゃんのおっぱいのむもん！』おお」
（PN：日下部峰雪　さん）

将太郎「見たまえ。世間は授乳ブームと言っても過言ではない」
勇気「あれ、おかしいな、微笑ましい風景のはずなのに、キチガイが紹介したせいなのかな、なんか病の匂いが……」
将太郎「ま、実際のところ、授乳は私も想定外であった。そこはまた別のジャンルだと思っていたからな。幼子に境なしということを失念していた……ありがとう、キミたち！」
勇気「ふ、2人はそういう意図では送ってないんじゃ？」

「ろりっ子の食事と言えば好き嫌いが目立つのが良いですよねー。嫌いなのに食べないといけないという葛藤がなんとも（笑）あ、もちろん嫌いな食べ物は『ピーマン、人参、しいたけ』でお願いします」　（PN：ふ～ちゃん　さん）

勇気「そういえば給食に食べられないものが出て、昼休みずっとそれとにらめっこしてたことがあったなぁ……ちゃんと食べるまで遊んじゃいけません、とか言われてさー」
将太郎「そういう時、栄太の奴は、机の奥に隠して遊びに行っていたがな。そして夏場にため込んだ食べ物から生き物が大発生してパニックに――」
勇気「ひいいいっ！」

「いっぱい、いーっぱい。子供の幸せの基本的はいっぱい。ご飯がいっぱい、お口にいっぱい、ホッペがいっぱい。でも口にご飯を入れたまま喋るのはNGです。キチンと叱りましょう」
（PN：俊太さん）

将太郎「しつけは重要だ。成功すると私のような人間に育つが、失敗すると栄太のような奴が出てくる」
勇気「どっちも失敗でしょうが……」
将太郎「あ、その子が口から零したものは、私に回してくれたまえ」
勇気「！！」

「レストランでテーブルに高さを合わせる子供用椅子やクッションに座ってエプロンを付けて無邪気に微笑むその姿、天使ですね」　（PN：竜宮　さん）

将太郎「そうか。子供用人間椅子（女児専用）としてレストランに働きに出るというのはどうだろう」
勇気「うん。その前に病院だね」

というわけで、ろり陣営公認絵師のみゅらっち先生に、イラストを描いていただきましたー。
みゅらっち「あれ、今回の投稿、意外と普通ですね」
か、描いていただきましたっ！

将太郎「ちっ、授乳じゃないのか……」
勇気「どんだけ授乳好きなんだ、あんた」

▼スレンダー陣営　お便り紹介

ノブ「じゃ、次はスレンダー陣営のお便りを紹介していくばんねっ。今回のゲストは、えーっと……あれ？　ヒロだけなの？」
ヒロ「うん。夏休みだからね……」

「これからの時代は長大な平甲板を持つ空母と随伴する小型軽快な護衛艦からなる機動部隊の時代だと思うのですが、未だ八八（cm以上）艦隊等という時代遅れの産物に拘る連中は何度議論しても分かろうとしてくれません。低血圧なスレンダーさんは寝ぼけたまま乱れたTシャツと下着で買い置きのクロワッサンと適当なインスタントコーヒーの朝食をいた

VSスレンダー
…年戦争

だきます。その無造作に組まれたすらりと長い足」（PN：日下部峰雪　さん）

ノブ「むう。ごめん、あたし軍隊関係のことって、あんまよくわからないんだよねー。フィーネがいたら多分詳しく解説してくれんだろうけど……」
ヒロ「そういうことならボクはキエフ級がいいなぁ。スラッとしてるけど出るとこは出てる人、いいよね」
ノブ「ここにもなに言ってるかわからない人がいた！　っていうか、前半の部分、テーマと関係ないし！　そういうのは軍隊の時にして！」

「スレンダーさんの懐で暖められた肉まん食べたい」　（PN：猫井篤　さん）

ノブ「懐で暖めるなら、きょにうさんたちの方がいいんじゃないの？」
ヒロ「それだと潰されちゃうって事じゃないの？　適度に隙間があるほうがいいんじゃ――」
ノブ「って、どこ見て言ってんのよ！」（殴打）
ヒロ「きゃー」

「麺類を食べているような偏見が……」
（PN：みぐら　さん）

ヒロ「細いからかな？」
ノブ「似合ってる感じはするけどね」

「スレンダーに映えるは裸エプローン！　と思ったけどこれ食事じゃなくって料理じゃね？　と我に返りました。食事を作ってるってことでひとつ」
（PN：グアゼ　さん）

ノブ「あ、すごい！　この人ちゃんと我に返ってる！」
ヒロ「このコーナーって、向こうに行っちゃったまま、帰ってこない人たちばっかりだもんね」
ノブ「あ、ウチは全然まともな人たちばっかりだよ。このコーナーの良心みたいなもんだし。でも裸エプロンかー。確かにあれは、胸が大きすぎるよりは、すらっとした人の方があってる気がするなー。ヒロが隠してる本を読む限り、だけど」
ヒロ「って、ちょっと待ってよ！　隠してる本って、まさか――」
ノブ「スカ系のは処分しておいたから。あと、あんまり近寄らないで」

「暑いこの時期になると、アイスくわえてたりペットボトル飲んでるスレンダーお姉さんの口元から首筋がなんともなまめかしい」　（PN：雪あとむ　さん）

ノブ「あー、ちょっと口から溢れたりしたのが、のど元を伝わったりとかって、健康的でいいよね。不健康なHENTAIに刺激が足りないかも知れないけど」
ヒロ「ううう、こ、好奇心が……自分の好奇心が憎い……」

「童顔巨乳という今日びの新人類に対抗すべく、効果は都市伝説だと解っていながら牛乳を飲み続けるスレンダーさんをヨイショ」（PN：セトの教授 さん）

ノブ「フィーネはまだ信じてるけど、言わない方がいいのかな……あ、そこの人は答えなくていいから。どうせ黄金を違った意味で使った、HENTAIトークを繰り広げるつもりなんでしょ」
ヒロ「そんなことはしないってば！　もう許してください、ホントに、お願いしますっ」
ノブ「え、土下座！？」

「大食いな女性ってなぜかスレンダーな方が多いですよね。体重を気にせず美味しそうに一杯食べる女性っていいよね」
（PN：あかべこ　さん）

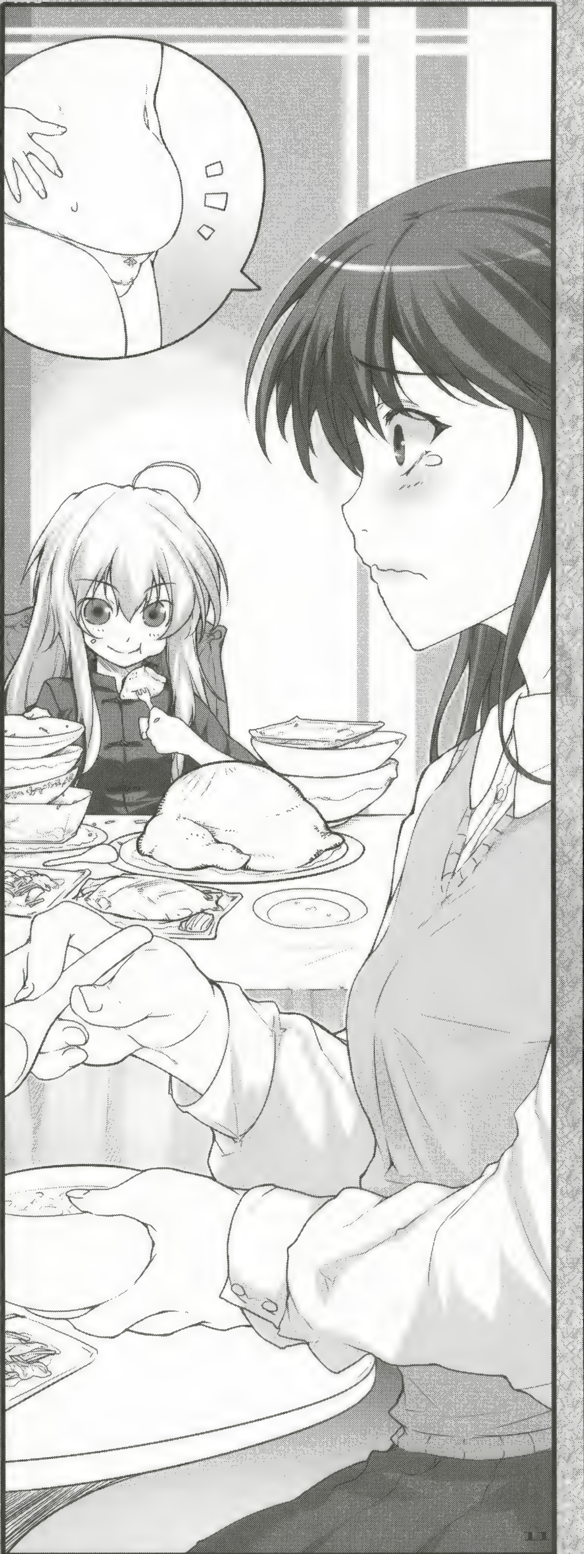
ノブ「憧れるよねー。でも実際にはそういう人ってあんまいないから……　白鳥が水面ですっごい水を掻いてるのと一緒で、みんな色々頑張ってんだよ、うんうん」
ヒロ「あ、白鳥って、浮くだけなら水を掻かなくても大丈夫らしいよ？」
ノブ「あ？」
ヒロ「ひい、すみません、殺さないでください」

「スレンダーさんは理想のボディーラインを目指して牛乳を飲んだり鶏肉を食べたりして（しかし貧乳）しっかり美容や健康を気にした食事をしていそうですねー（けれど貧乳）食後にサプリメント飲んだりしてそうです（それでも貧乳）」
（PN：しの　さん）

ノブ「フィーネは全部やってるけどね」
ヒロ「きっとこれ読んだら暴れ出すよね……」

スレンダー陣営公認絵師の東麻姫先生に、イラストを描いていただきましたー。東麻姫先生のコメントです。
「スレンダーさんの悩みといえばその体型ゆえにポッコリおなかが目立ちやすい事があると思います……！　若い子は筋力も内臓も強いのでいくら食べても～を地で行けますが、ある程度年齢が（日記はここで途切れている）」

ヒロ（でもちょっと出たお腹もまたそれはそれで……）
ノブ「なんかHENTAIチックなこと考えてるでしょ」
ヒロ「！！」





▼巨乳陣営お便り紹介

モコ「では最後に、われら巨乳陣営のお便りを紹介しましょう。今回のゲスト兼解説者は―――　巨乳と言えばこの人、我がピンク小隊の頼れる整備士、大停蘭子伍長です」
蘭子「どもー。でも巨乳っていうなら、あたしより、るみるみのほうがいいんじゃないの？」
モコ「あの人は全然喋らないですから、それならまだ蘭子さんのほうがいいかなーと」
蘭子「消去法かい」

「果実は、熟れ切り、腐り落ちる寸前が最も甘美だという。これをおっぱいに応用すれば、垂れかけ年増巨乳のおっぱいが最も素晴らしいということではなかろうか！　なかろうかっていうか、自然の摂理！　宇宙の法則！　あぁ、垂れかけ年増巨乳に栄光あれ！　え？　テーマは『食べ物』じゃなくて『食事』？　じゃあ、胸元ゆるい服着せてＢＢＱにでも行きなさいよ。前のめりになることが、かなり多くてね。友達のお母さんが実は巨乳だったことに気づけるぞ！」　（ＰＮ：アンドリュー　さん）

蘭子「この人はあれだね、ろり陣営のおっさんと同じオーラがにじみ出てるよね」
モコ「ちょっと、投稿者に対する感想はやめてください！　ていうか、それ完全に名誉毀損ものじゃないですか！　投稿来なくなっちゃったらどうするんですか！」
蘭子「えー、褒めてるのになぁ」
モコ「全っ然、そんな風には聞こえません！　ていうか、アレと一緒なんて、正直刺されても文句言えないですよ？」
蘭子「そっかなー」
モコ「は、話を投稿の内容に戻しましょう。え、えーっと、蘭子さんも、そろそろアンドリューさんの言うところの最高のおっぱいになってるんじゃ―――」
蘭子（スパナで殴る）
モコ「あいた！　な、なにするんですかー」
蘭子「いや、視覚系が調子悪いみたいだから、叩いてみたんだけど。で、誰のものがなんだって？」
モコ「ひいっ、な、何でもありませんっ。蘭子さんのはピチピチです、ピチピチです！」
蘭子「よろしい」

「巨乳ちゃん＝大食いではないと思うものの、たくさん食べたのが胸につまっちゃうんだね！　って言われてむきーってなってたら可愛いです」（ＰＮ：みぐら　さん）

蘭子「いろいろ言われるもんねー。それ以外だと、食事ってテーマ離れちゃうけど、巨乳は頭が悪いとかさー。そんな単純なものじゃないっての。現にあたしだって、神山出身のエリート整備兵やってんだし」
モコ「ちなみに、そのエリートさんは、あたしのことどうやって整備してます？」
蘭子「スパナで殴って」
モコ「………………」

◎今月の食人族コーナー

モコ「今回はテーマのせいか、直接的に食べに来てるマンイーターな人たちが多かったので、一気にまとめてご紹介いたしますっ！」

「巨乳っ娘の場合、食べるより、食べられる側だよね。つまりそのたわわに実ったそのおっぱいを頂かれるんだよ!　チューチュー吸われて頬を染めるお姉さんとか実に食欲が枠と思うの!」
（ＰＮ：トリスメギストス　さん）

「巨乳、食事……　おっぱい、ごはん……
『おっぱいをいただきます』です？
（'v'*）」　（ＰＮ：しの　さん）

「これはあれですかね。巨乳で食事ということは、そのたわわに実った果実から出る、甘い汁を吸わせて頂けるとかそういうことで良いんですか？　良いんですね!　ではいただきm」
（ＰＮ：くたばりかけの梟　さん）

蘭子「うん、ブレーキぶっ壊れた感じがいいねー」
モコ「え、いいんですか、止めなくて！？」
蘭子「止めたらもったいないじゃない？　ここはある意味ハレの場だから、突き抜けないと損だよ」

というわけで、きょにう陣営公認絵師のせんばた楼先生に、イラストを描いていただきましたー。
せんばた楼先生のコメントです。
「夏の味覚と言えばチョコバナナです。決定です。夜店などでお馴染みですが、旨そうと思って喜び勇んで買いますが、くどいほどの甘ったるさでなんでこんなもの買ったのかと己を恨みたくなりますよね。まだまだ暑いので涼しい格好でどうぞと」

モコ「せ、先生、涼しすぎます！！」
蘭子「いや、夏はこれくらいじゃないと」
モコ「そ、そうなのか、なぁ……」

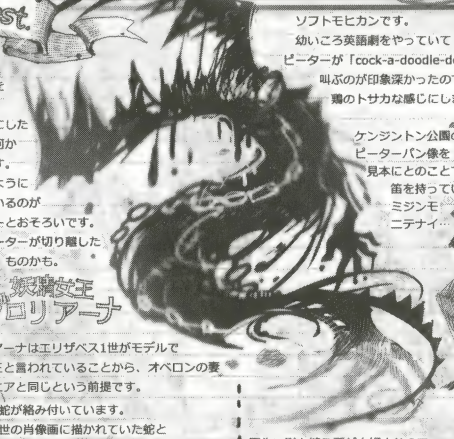
■お便り募集！

早苗「ＬＬＥのいぶ」若葉「では次回のテーマを発表しますね」早苗「せ、せめて名前くらい言わせて」弥生「次のテーマは『睡眠』よ。寝てるところだけではなくて、寝間着であったり、関連することであればなんでもかまわないわ」早苗「セリフ長い！　ズルい！」若葉「それぞれの陣営の『睡眠』に関する魅力を語ってくださいね」弥生「もちろん、テーマも募集しているわ」若葉「それではお便りお待ちしてますー」早苗「あ、あたし、なんにも言ってない……」


誰も得をしない近況マンガ
鳥さんといっしょ 11
ジェシカ
こうして子供たちに囲まれているセーラを見ても、貴女を思い出す事が無くなってしまったとしたら
ワー
ワー
貴女は僕を許してくれるでしょうか
あれ？クラウスじゃんぼーっとしてどうしたんだろ…？
セーラちゃんボールー
……
よし、今日はもうおしまい！みんな気を付けて帰る事！
えー
はーい
またねセーラちゃん
バイバーイ
…ほら、帰るわよクラウス
あれ？セーラ何か怒ってませんか？
別に？
え、でも…
うっさい！
ゲシッ
あっ…
あっ…いい！今日は積極的ですね！外でとか！
だーっ、もうっバカ！変態！死んじゃえ！


蒼天スチームパカァーズ!!
配送代行？
あなたが？
ゴゥン
そりゃあ
助かるけど…
結構
大変よ？
大丈夫？
ゴウン
ゴウン
余計な心配は
無用だ
任せておけ
お前に
できる事なら
問題ない
だが…
なにか
臭いな…
これが
異文化
交流…！
おお
ありがたい
ワシらは
肉に目が
なくてねぇ
特に
腐ったのは
格別さね！
アーン。
あー
洗礼モロに
受けちゃったか
お前は
大したヤツだ
コニー……
フゥ…

Memory of ancient forest



チクタクワニ

都会の地下、ケーブルの束を
意識して描きました
フックの時計と手を憑代にした
足元から這いよる何か
恐ろしいものです。
胴体が千切れたように
なっているのが
ピーターとおそろいです。
ピーターが切り離した
ものかも。



エリザベスカラー。

妖精女王グロリアーナ

グロリアーナはエリザベス1世がモデルで
妖精女王と言われていることから、オベロンの妻
タイタニアと同じという前提です。
腕には二匹の蛇が絡み付いています。
エリザベス一世の肖像画に描かれていた蛇と
タイタニアは月の女神ダイアナの異名であると
いうことから月の子、蛇、アウリンという連想で
双頭の蛇にしました。
また、月の女神で妖精を従える所から
かなりキラアク星人（怪獣総進撃）
ぽくしましたが誰も気付いて
くれませんでした…。

てるてる。

タイタニアはほれ薬をまぶたに塗られて
瞳を開けると見た者を好きになってしまうので
神聖さが薄れると思って閉じさせました。
なんと言うか逆シャカ的な。

真夏の夜の夢で
蜘蛛の巣の
ベットで
休むという
描写が
あるので
↓
アミアミな
スカートです。



妖精王オベロン

ソフトモヒカンです。
幼いころ英語劇をやっていて
ピーターが「cock-a-doodle-doo！」と
叫ぶのが印象深かったので
鶏のトサカな感じにしました

ケンジントン公園の
ピーターパン像を
見本にとのことで
笛を持っています。
ミジンモ
ニテナイ…

原作で影を縫う所が大好きなので
影が千切れたっぽいカギ裂きな服にしました。
背中のは外れたサスペンダーです。
目に光が無いのでこっちが影の方疑惑。
また、少年灰流にも取れる
外見にもしました。

コンテンポラリーダンスっ
ぽい格好にしています。

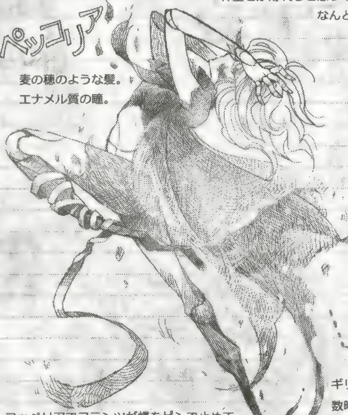
影は地面を這うので
重力を無視して
飛ぶ本当のピーターとは逆の
重力ダンス。



ティンカーベル

妖精族は
目の中に
お花が
あります。

アンミラ。



ペッコリア

麦の穂のような髪。
エナメル質の瞳。



時計ウサギ

私物のBabyGです。
時代はめぐり
時計ウサギの
時計もアナログから
デジタルに変わって
ピアスもあけましたよという
コンセプトです。
Gは一時すごく流行った
せいか新しいような
懐かしいような
複雑な気持ちに…。

灰流と同じ服ですが
ツギハギだらけ。



ギリギリに追加発注されたキャラクターです。
数時間しか余裕が無くてあまり勉強できなかったので、
サブキャラではほとんどなかったリテイクを
かなりいただきました。急がば回れだったー！
自分でもなんだかしっくりいかなくて作品が出ても
考え続け、後のコラム・ヨイドレエレジイで
マイナーチェンジしました。当時のNHKスペシャルで
カモシカのようなカーボンの義足を見てそれを取り入れてます。
偶然今年のオリンピックに出場してましたね！

コッペリアでフランツが蝶をピンで止めて
スワニルダが悲鳴を上げるシーンがあるので、
針＋蝶から蝶の入れ墨をしています。
格好も蝶的に。



タシアスラン

原作で表裏一体という
下りがあるので
お互いのシルエットを切り取って
形を取りました。

タシは原作に
イラストが
あります。

新宿東口広場の
ライオン像が
見本です。



魔都拳侠傳 マスクド上海

■マスクドシャンハイ未公開ファイル

このマスクドシャンハイ未公開ファイルは、俺が魔都上海で遭遇した事件の中で、本編では様々な事情で取り上げられなかったものについて、詳しく紹介していこうというコーナーだ。

さて、今回取り上げるのは“現代アート殺人事件”だ。

この事件で一時上海の都市機能は完全に停止したのだが、あんまりひどいアートな事件であったため、上海の公式記録には一切残っていない。それは他の事件とも同じなのだが、この事件は他のものと異なり、解決したのも俺ではないため、公式ファイルでは扱っていない、という代物である。それになんというか、結末が非道い。個人的にもあまり思い出したくない事件なので、これから先の文章を読むのはあまりお勧めしないが——　まぁ暇のある奴、もしくはグロ好きな奴は、ざっと目を通してみるのもいいだろう。

▼ファイル本文

上海の街を、得体の知れない物体が徘徊するようになったのが事件のはじまりだった。これがなんと表現していいのか……　子供の落書きが壁から抜け出して、そのまま動き出したようなものなのだ。

俊作「仙界の生き物……　なのか？　山海経に載ってる生き物っぽいけど」
タマ「バカにしてんの？　あんな気色悪い生き物、いるわけないでしょ！　ていうか、生き物なの、あれ」
俊作「動物ではあるんじゃないか、動いてるんだし」
タマ「化け物よ、化け物！」

で、地道な捜査の結果、この化け物を生み出しているのが「お絵かき仙人」であることが判明する。あ、お絵かき仙人がどんな奴かは、右側の写真を見ていただきたい。こいつが上海で落書きしたものが、そのまま実体化して、街を混乱させているのだった。

一度軽く戦ったものの、軽く撃退された俺とタマは、事務所に戻って対策を練っていた。と、そこになんの前触れもなく川島芳子が現れる。

芳子「ここはボクに任せてもらおう！」
俊作「お、お前は、川島芳子！　って、なんでこんなところに！？」
芳子「そんなことはどうでもいい。それよりも、この騒ぎを収めるのが先だ。そうじゃないかい？」
俊作「いや、そうだけど……　でもどうやって？　なんかいい考えでもあるのか？」
芳子「もちろんさ。この巷に溢れている化け物ども——　まさにアート！！　これはとびっきりの現代アートさ！　ボクにはわかる！　芸術家の魂を持つ活動家であるところの、このボクにはね！」
俊作「はぁ。俺にはさっぱりだ」
芳子「やれやれ。これだから凡俗は……　ともかく、騒ぎを収める方法はひとつだけ。あの悪仙の創作衝動を満足させればいいのさっ！」
俊作「簡単に言うけど、どうやってだよ」
芳子「そいつは任せておきたまえ。ボクにはわかるんだ。おなじ芸術家同士、あの悪仙人がなにを求めているのか……」

単身、お絵かき仙人の元へ向かう芳子。で、その結果どうなったかというと——　左のマンガを見ていただければわかるように、混乱がさらに悪化したのだった。結果、全裸の川島芳子の大群に襲われ、上海の都市機能は完全に麻痺してしまう。

上海市民「ひいいっ！　川島芳子の群れが！　窓に！　窓に！」
芳子「待て待て待て！　これのどこがボクなんだ！　似ても似つかないじゃないか！」

俊作「でも横に名前が書いてあるからかなぁ……」
お絵かき仙人「わかるようにちゃんと書いておいたよー」
芳子「………………」（小刻みに震える）
お絵かき仙人「芳子たん？」
芳子「チハ坊！　やれ！」
チハ車「バンジャーイ」（戦車で仙人を蹂躙）
お絵かき仙人「きゃー」

で。１４０万仙人強度を誇るお絵かき仙人であったが、１５トンの鉄に轢かれてはひとたまりもない。あっという間に倫理規定に引っ掛かるスプラッタボディになってしまうのだった。

俊作「うわー……　こりゃミンチよりひでえや……」
タマ「しげしげ眺めてる場合じゃないでしょ。さっさとやることやりなさいよ！」
俊作「え？　な、なにを？」
タマ「きまってんでしょ、封印よ、封印！」
俊作「正気か！　だってこれ、もう仙人じゃないぞ。挽肉だぞ」
タマ「なら抵抗がなくていいじゃない。ほら、さっさとしなさいよ！」
俊作「まじか……」

こうして、俺はミンチ状の物体と猟奇的な行為におよび、これを封印。俺と川島芳子の心に大きな傷を残して、事件は解決した……　だがいつまた、恐ろしい悪仙人が上海を襲うかわからない。悪仙人を全て封印するため、俺は戦い続けるのだっ。今日も、そして明日も。うう、ううう……

▼今回登場の仙人

○仙人名「お絵かき仙人」

・推定仙人パワー：１４０万パワー

・特殊能力：描いた絵を実体化させることができる、ただし制御はできない

※今回登場の仙人は、ＰＮ：竜宮さんからいただきました。竜宮さんには５ｐ差し上げます。また「事件の傾向」では「バカ」が一番多かったです。投稿してくださった方には３ｐ差し上げます。
ありがとうございましたー。

■投稿募集

このコーナーでは皆さんから投稿をお待ちしております。

○あなたの考えた仙人を募集！

あなたの考えた仙人を募集します。葉書もしくはメールに「仙人の名前」「特殊能力」「推定仙人パワー」を、外見と一緒に書いてお送りください。ちなみに正義仙人の仙人パワーは１００万弱。マスクドシャンハイは人間から仙人に改造された戦時急造仙人なので、若干低めの８３万仙人パワーとなっています。

投稿された仙人の中から１人を選び、未公開ファイルに登場させていただきます。採用された仙人は磁油２先生にイラスト化される予定です。

【記入例】

仙人名「マルクス仙人」／特殊能力：赤い
／推定仙人パワー：２０００万仙人パワー。

○事件のジャンルも募集中！

同時に皆さんから事件のジャンルも募集しています。未公開ファイルのうち「燃え」「バカ」「エロ」の３ジャンルから見たいものをひとつと、もしあれば、他に出て欲しいキャラクターや見せ場などを一緒に書いてください。無い場合はジャンルだけでも構いません。投稿されたジャンルのうち、一番多かったものを反映した事件の紹介を行う予定です。

【記入例】

事件の傾向：エロ／出して欲しいキャラ：日和子／その他：眼鏡最高です！



漆黒のシャルノス　『探偵助手の記憶』

■1908年、某月。ロンドン■

「ええ、大丈夫。明日は午後も一緒にいられます」
『ほんとに？』
「本当に。嘘なんか言わないわ、アーシェリカ」
　顔を洗って、着替えて、少し焼きすぎたトーストと即席式カップスープで早めの朝食を取って。ミセス・ハドスンは時間を合わせて早く朝食を作ってあげてもいいのよと言ってくれたものの、流石に悪い気がしてしまうし、何よりも、自分の面倒はなるべく自分で見る癖を付けておきたかった。機関式のトースターと発熱ポットで、ごく簡単な朝食くらいは。
「……でも、どうして焦げちゃうのかしら」
『ふぇ、なんか言った？　メアリ？』
「ううん、こっちの話。それじゃあまたね、アーシェ。明日にまた碩学院で。もう早起きし過ぎはだめよ」
『はーい。でも、約束ね』
「ええ。約束。また明日」
『また明日！』
　無線電信通信機（エンジン・フォン）越しにアーシェリカへ明日の約束を交わしつつ別れを告げて。
　鏡の前に立つ。
　黄金色の右瞳と、透き通る青の左瞳。
　自分の――メアリ・クラリッサ・クリスティの姿があった。
　髪、少し伸び過ぎかもしれない。書類や蔵書の整理をするには、少し、邪魔なくらいに。
「纏めておいたほうがいい、かな」
　前に、ザックに貰った髪留めがあったはず。
　メアリはクロゼットを開けて――

◆　◆　◆

　傘差して、早朝のウェストエンドを歩く。
　霧と排煙と煤の混ざったロンドンではあるけれど、朝の空気は、それなりに心地良い。寒さとまでは行かない涼やかさ。大きく吸い込んでしまえば噎せてしまうこともあるものの、それでも。
　メアリは、この朝の時間が嫌いではなかった。
　夜が明けていく感覚がある。
　これから、今日という日が始まるのだという感覚。
　あとは……。
　そう。今日は、特に、気分が晴れやかなのだ。
　二週間近く続けてきたかの名探偵氏の蔵書整理が、ようやく、一昨日に終わった。昨日すなわち土曜は助手（というか蔵書整理）の仕事は休みだったから、今日という日曜日は、蔵書整理が終わってから初めての出勤日ということになる。
　これもすべて、友人たちのお陰だった。アーシェに、ミスタ・ハワードに、ザックに、道っ子（ストリート・チルドレン）のふたりに……子供たちの友達の他の子供たちも沢山手伝ってくれた。シャーリィも参加したがったものの、まだ無理はだめよと、ドナと一緒に言い含めて。最も大変だった蔵書整理、分類ごとの整頓等々については友人諸氏の助力のお陰もあって短期間で終わっていたのだった。結果的に、メアリ自身は大分楽をしてしまった実感さえあって。
　少なくとも、今週ぶんの賃金については皆で分ける必要があるわと考えていて、足りないようなら今後の賃金も――と、最早、何のためにかの名探偵氏の助手のようなものを務めているのか、生活費のやりくりを自身で済ませられるようにという当初の目的を些か忘れかけているのだったけれども、その話はまた今度。
　今日という日は確かに特別だったのだ。
　これまでも、蔵書や捜査資料の整理が主な仕事ではあったものの、捜査行に付いて行ったり、犯人当ての現場に同席したことも数度ほどあったものの。
　――今日は、忘れられないほどに《特別》だった。
　――なぜかというと。

◆　◆　◆

　メアリが碩学院での学業の傍らに名探偵氏の助手――のようなものを務めるようになってから、三週間ほどが過ぎていた。
　ただ、ここ二週間の業務を省みると、助手という言葉は語弊があるように思える。やっていたことと言えばあのベーカー街Ｂ２２１に隣接した建物まるまるひとつを用いた図書館の如き「資料室」の蔵書整理や掃除ばかりで、いざ名探偵氏の扱う事件資料に触れるどころか、手にする機会さえなくて。
　特に何を思うこともなく、ただ日々淡々とメアリは業務をこなしはしたのだけれど。
　むしろ、相場の倍近くは貰っていた日毎の給金の多さに恐縮しつつ「これは手伝ってくれた友人たちに渡そう」と考えるくらいで、他には特に何も。名探偵氏の蔵書や収集品を目にすることは大いに知的好奇心を充足させてくれたし、特に興味を抱いた本の類については貸し出しさえ許されたし、長い新婚旅行から戻ったという名探偵氏の“相棒”ことジョン・ワトスン医師が時折してくれる諸外国の話は、父がかつて探検した未知の国々のことを思わせてもくれて。
　充実していたと思う。
　だから、特に何を不満に思うこともなかった。
　だから、今、この《特別》な瞬間を大いにメアリは動揺と知的好奇心の疼きを以て迎え入れることとなったのだった。
　すなわち――
　ベーカー街Ｂ２２１の部屋に入ったメアリは、気難しげに何かを思考する名探偵氏に「厨房を借ります」と一声告げて、返答ないままに紅茶を淹れて、出して。やはり返答はないのねと思っているところにこんな一言を掛けられたのだ。
　興味深げに、噛み締めるように。
「申し訳ない、ミス・クラリス。考え事をしていたのだ」彼は静かに続けた。「先刻、面白い案件が持ち込まれたんだ。捜査における犬の利用について、真剣に、短い論文でも書こうかという気にさせてくれる程にはね」
「恐縮ですが、その」
「言いたまえ」
「警察犬のことを仰ってるのですか？」
　反射的に、そう言いはしたけれど。
　驚いていた。
　こんな《特別》なことがあるだなんて。
　――まさか、言葉を掛けられるなんて。
　――名探偵氏が思考する、何らかの捜査内容について！
　これまでに一度もないことだった。
「いや。その方面の話ではないよ、ミス・クラリス。なぜ、ケンフォード大学の碩学、プレスベリー教授のウルフハウンド――ロイが、彼に噛みつこうとしたのか」



　アイリッシュ・ウルフハウンドのことだろうか。
　気性の穏やかな、大きな犬だと記憶していた。
「奇妙、ですね」
「奇妙か」
「大学の先生の飼い犬なら、躾のできた子かな、と」
「無論。ロイは、誰をも攻撃しないし、特別な状況を除けば主人を困らせたりもしない、優秀な飼い犬だった」
「なら、やはり奇妙だと思います」
「まず第一に体調不良の可能性は考慮されるべきだろう。しかし、そう奇妙なことだ。非常に奇妙なことだとも」
　その場では、それで終わってしまった会話だったけれど。
　特別な驚きはこれだけではなくて――

　朝早くだというのに、その人はＢ２２１へ姿を見せた。
　初めて目にする紳士だった。
　年齢は三十歳頃、背の高い男性。上質なスーツを着て、仕草には紳士らしい品が見て取れる。けれども、彼の立ち居振る舞いについては、些か若々しい学生らしさのような躊躇いが見え隠れするように、メアリには思えてならない。
　つまりは、名探偵氏へ依頼を行うべく現れた人物だった。
　こんな早い時間に……もしかして、今朝は早めに来るようにと名探偵氏が一昨日の帰宅時にメアリへ告げたのは、これを見越していた故だろうか。
　彼は名探偵氏と握手してから、少し驚いた様子を見せた。奥の厨房から新しい紅茶をふたりぶん淹れてきたメアリを目にするにあたり、明確に、神経質さを隠しもせずに。
「この件は非常に繊細なのです。ミスタ・ホームズ」彼は口早に続ける。「私がプレスベリー教授の公私に関わっているという状況を考えれば、第三者がいる前でこの件を口にして良いものか」
「ご心配なく」
　そう。
　驚くべきことに――
「ベネットさん。ミス・クラリスは非常に口の堅い人物です。そしてあなたに断言しましょう。これは、私が補佐役を必要とすべき事件であると」
　名探偵シャーロック・ホームズ氏はそう言ったのだった。

　――まさか、まさか。
　――こんな《特別》があるなんて。
　――名探偵氏の“事件”の補佐役だなんて！

（つづく）

りとってやった時にも回し頭巾を交わし合っていた事など知りようもなく。

◆ ◆ ◆

シザムとキサラは、それぞれ彼らから長期間離れてしまうと狂を発してしまうという難儀な宿業持ちである。それゆえ、一方の青年は自ら担いで山の頂まで上がったものの、一方の娘は縁者を呼ばして峠まで運び出させた。で、それぞれの付き人達を返し、自分達と男女のみ残し、峠の岩陰に意味深もりすると告げた時には、双方の付き人氏に、戸惑って否んだ。当然の意義を、双子は深々と喫って吐き出した御巻きの裏巻の紐で文字通りに煙に巻いた。

「うふふほほは、なにをなさる……っ？」

「ほっら。今あんた達には嫌いの蟲が憑いていた。これは蟲封じの薬って奴でね、払ってやったよ、有り難く思いな」

「い、言われてみればその様な。どうにも僕らはお山に近いせいか、虫が寄ってきてなぁん……」

「…………………………………………ちょれぇ」

「はぁ？　今、なにか？」

「いーやなんでも。ほらさっさと戻った戻った。こっちゃこれからこの二人の蟲封じた。早くやるに越したこたぁない」

東人達を帰して後、双子は先に本陣に休ませてあった青年の下へ、娘を抱きかかえていったのだが、二人がお互いをうっすら目で認めるやいなや、それまで憔悴の極みにあった男女の目に、かえったのは精気、異様なまでな。

「一雄——！　やっと——！」

「九郎太、あー……逢いたかった——……」

伸び布を跳ねのけ、キサラの胸元から身を捩って滑り降り、互いの名を連呼しながら駆け寄る二人の男女。双子ながらしっかと抱き締め合う。

「落ち着けって、まだ人目がある。峠の茶屋の婆の目が光ってる」

「お互い、やり始め、味を覚えたばっかで夢中になるのも解るけど、もう少しだけ待ちな」

「つーのー！」

それで、日は維も九郎太も病人らしく寝上ってはみたものの、それぞれの観光事帯ではなく潤み、息も荒く、青年の着物の前はしるけくて突っ張り、娘はもじもじ太腿を摺り合わせ——

◆ ◆ ◆

峠頂から更に奥、山歩きする商師でさえ容易には近づけぬ山懐と渓流とが結界のように閉ざした、森の奥も奥に、その洞窟はひっそり隠されていた。

数日前まで、は。

今や洞窟の奥からは、ひっきりなしに声が漏れ伝わってきている。ひっそり、どころの話ではない。甘噛むのような声に、啜り泣くような声は、もっと聞けば獣の様な声をも含んでいるかの如きだが、すぐに気がつくであろうの、熱い、牛の快楽のままに垂れ流しにされている音である事を。

「ぬいい。ぬいい、ぬいい、溶けるぞ、今溶けるぞ、たぁぁーー！　ぬ……ぬぞうぅ！」

「くるうた、あんたぁ、して、もっといっぱい、あの人達みたいな双子、ううん、三つ子に孕んじまってや……ぁあー……っ」

更に耳を澄ませば、肉体と肉体が重なり合う湿った音、洞窟の中じゅうを絡んではほぐれつ転がり回っている気配も伝わろう。シザムとキサラは、洞窟の前に門番のように侍りながら、早朝仕留めてきたばかりの大なる猪を血抜き、皮剥ぎ、解体して毛皮や肉など小気味よく処理している最中の、集中しているようであったが、絶え間なく続く喘ぎ、というか子作りの響きに時折顔を上げさせ、ちらちらと手を留めたりして。

「いいなあアレ、やっぱ山国の連中のセックスって凄いよね。なんかこっちまで当てられて……」

「あっちのクローダの方、ちょっといいから貸してくれないかって。無理そうだねありゃ」

「昨日なんか抜かずのフハで八発くらいやってたし。朝鳳じゃあるめぇに……」

二人のぼやきを逆撫でするように、絶頂の嬌声が長く糸を引いて、双子は苦笑を禁じえなかった。

「しっかし、なんだってどっちの親共も気づかないかなこんな単純な事」

「あの二人のやつれたのって、要はやりたい盛りのサカリが会えない時のそれだって、よーくに判ったろうに」

「しっかし、なんだ、あのタイって子の方が誘ったってのは、やっぱ清楚そうな子ほど中身が凄いってコトか」

「三月前、峠でちょっとすれ違っただけで一目惚れ、その日のうちに処女喪失&童貞喪失ってのは、はっ、随分段取りイイこった」

交わう声は、一時止んだと見えて、すぐさま新たな波が起こって繰り返す。

「……やっぱ混ざってこない？」

「やめとけやめとけ、あたしらが混ざんでる時だって、ナンヤンにあったてておきながら、こっちの尻にも胸にも手を出してこなかった筋金入りじゃねえの。毛唐の女は嫌なんだろ」

と手を留めて、洞窟に振り返り怒鳴りつける。

「おーい二人とも！　しばらく食ってけるだけの肉を乾してくからさ、夜は棒とかハンターとかに気いつけて、しっかり子作りしろや、どっちの親も取り返しがつかなくなるくらい作って産んじゃえ」

「う……あ……？　ま、すまない、なにからなにまで……とおふっ！」

「あんた、やめない、で、しっと、しっとぉよ。うたい。わたしももっと締めるから、お腹で孕むからぁ……っ」

男を行為に引き戻す発情しきった声に、シザムは溜息を漏らしかけ、すぐに表情を変えた。

「なぁーに、気にすんな、ギブアンドテイクだ。あんたらすっげぇ砂金の鉱床、うちらに全部譲渡すってぇ気前の良さにゃ叶わない」

洞窟から程近い、渓流の河床を蜂蜜色に輝かすほどの上質な金の鉱床は、九郎太が見つけ出したのだとか。この素朴な双子をここまで動かせ目論ませ、骨折りさせてでも、余りある褒賞であった。二人をして今しばらくはこの山中に留まり、生涯に亘る男女の身の回りの世話、棲まわせるに足りた、という。

——シザム&キサラ・洞窟編了——

信天翁航海録寄港文

＊シサム＆キサラ・蟲師編＊

「――こりゃあ「蟲」が原因だねぇ――」
二つの山脈によって隔てられた、山裾の、そのまずは西側の山里で、褥床敷で寝ついてしまった年若い娘の容態を触診し、そして二親に問診してから、その金髪碧眼も鮮やかな双子の女達は、そう見立てた。自信に満ちて。

「――ああ、これも「蟲」の仕業だよ――」
二つの山脈によって隔てられた、山裾の東側の山里で。数日後、西の山里から峠を越えてきた、この時代まだ珍しい洋装を、乳房と腰とではちきれんばかりにさせた、北方の異国生まれの双子は、離れで寝ついてしまった年若な青年の容態を触診し、そして二親に問診してから、そう言い切った。確信に満ちて。

世の中の病や色々の怪異の中には、いまだその時代の科学では解明されざるものもあったが、その他にも、「蟲」と称される、人間や野の生き物より、より「命脈」に近いところに位置する存在が引き起こした事象が確かに存在していた時代。そんな「蟲」達を相手に、観察し、記録を残し、対処の術を身に着けた「蟲師」と呼ばれた者達が、里から里へと逍遥していた時代の、これは一つの挿話である。

◆　◆　◆

「ああ?「狩り行こうぜ!」はどうなった?」
知るかいンなこたぁさ」
「そうそう、大体あゝいうのは時事ネタだし、ちょっと間を置くとしよう、みんな飽きちまうし」
「モンスターも倒して、狩ってまぁ区切りしたわね」

◆　◆　◆

西の山里の娘も、東の山里の青年も、それまでは元気に紙や畑仕事に精を出していたのに、ここ数ヶ月ばかり仕事に上の空になるようになり、それが徐々に悪化して、食事も細くなり昔以も立ち居もあやふやとなり、しまいには倒れるように寝ついてしまうようになったらしかった。
両者共に共通項は、熱病かと見まごうほど顕の紅潮、なのに発熱に伴う喉の渇きや関節痛もなく、意識の混濁とまではいかないものの、思考能力の低下、そのくせ一心不乱に何事か考え詰めているらしい、という共通項が見受けられ、巡回の医師も原因は見きわめられず、解熱薬と鎮静剤を処方していくのが関の山。
困り果てたそれぞれの二親を訪れたのが、前述の双子の蟲師で、始めは親たちも、異人で女の双子という奇妙な二人に難色を示していたけれど、
「あの……私どもは見ての通り慎ましい百姓で、満足なお礼など出来そうにないんで」
「そんなの見りゃあわかるって。あたしらは別に山賊追い剥ぎの類じゃなくって、えーと、蟲師だ」
「下り周り……こほん、巡回の間の、食い物とかちょっと手助けしてもらえりゃあそれで良いよ……あ、あと出来れば酒も、ちょっとは」
「はぁ、その程度でしたら、出来るだけ用意させていただきますが……」
「よっし話は決まった!」
双子はそれぞれ片手を大きく掲げて、音高く打ち鳴らせば病人の床には不謹慎なほどの音がつんざき、二親達はつい眉根に皺を寄せたの、、双子のかたわれ、シサムが指を振りながら窘め顔の、
「あー駄目駄目、「蟲」は人間の気の弱さに漬けこむ奴もあるんだ」
双子の一人、キサラも腕組みのもっとも顔で頷きつつ、
「そう言うこと。相手には、そういう蟲共を追っ払う効果もあるんだよね。どうかなこの部屋。今のでちょっとは空気も晴れたろう?」
「言われて……見れば……そんな気も。で、そうですよね。私どもが沈んだ顔をしていては、この子にだってそれが伝わる、差し障る」
なるほどと確かに、双子の陽気でやかましげな挙措は、病床に立ち込めがちな暗い気を払ったようにも思え、二親達はこの蟲師への認識を今少し改めた。
そこへ、更に切り込むようにキサラの追撃が加わる。
「ところでさ、この子、三月くらい前に、そこのお山の峠とかに登ってたりとかしたでしょ?」
「え、何故それを。蟲師というのは、八卦見もなされるのか」
「ホーねー。いや卦とかそういうんじゃなく、この子に憑いた蟲の塩梅見りゃあ判るのよ、そんくらい」
おお、と二親ともに漏らした嘆息が、キサラの指摘が事実である事を雄弁に認めており、これでこの善良な人々の信頼はより深く……二人に背を向けて、シサムは何やら背嚢を改め、蟲封じの薬でも求めている風であったが。
その口元には、堪えきれない笑みが蛇のようにへばりついていたのであった。それ、女を騙して岡場所に売り払う女衒の微笑、それ、法律を心得ない者を騙して借金の連帯に判を捺させる三代目のほくそ笑みに等しい。
「……………………ちょれぇ」
「はい?」
ぽそりと呟いた声音が聞き取れず、問い返した親たちに、シサムは殊更さっと真剣な貌を作り、
「聞こえなかった? その峠で蟲に憑かれたんだよ。つまりこの病の大元はそこ、峠。連れて行かないことには、蟲は払えない」
「……病人を動かして、大丈夫でしょうか」
「それはあたし達が」とシサムが、名に懸けて請け合う。「こんな美味し……あいや、素朴な男や、優しそうな女の子を死なせたりなんか、しない」
自信に満ちた静かな物言いに、二親は、深々と頭を下げた事である。
その頭上で、双子が世にも珍妙な顔芸で互いの首尾を讃え合っていた事には気づきもせず。
二人が両親な商人から手練手管で一切合切を

■前回までのあらすじ

　未来から来たダリア達３人は大輪女子女雪相撲部に仕合を挑む。
　緒戦、ダリアの後輩・蝶子が豆斯波を下すものの、次戦ではマイの海が梅を葬り、一対一で迎える最終戦。
　ダリアの相手は侘助と決まる。
　そんな中、斜塔が火に包まれ……。

■斜塔編最終回

～勝利か死か～

「ダリアちゃんには悪いけど、本気で行くから怪我しても恨まないでね！」
「あたしも本気で行くから死んでも恨まないでね！」
「死ぬとか！　大げさすぎるって！」
「そう言ってられるのも今の内だって！」

　もうね、何事かと思ったよ。
　だってさぁ、ダリアちゃんが構えたと思ったら手に黒い塊が出来たんだよ！？

「必殺！　ブラックホール張り手ー！！」
「えっ！？　ちょっ！！」
「侘助っ！　かわせっ！！」
「ど、どすこいっ！」

　三ツ葉さんに言われるまま、飛んで来た黒い塊を避けたんだけど……。

「な……壁に、穴……？」
「小型ブラックホールだからね。そんな木の壁なんかなら簡単に穴開くよ」
「小型ブラックホール？　……本物？」
「本物」
「そんなのぶつけられたら、あたし死んじゃうじゃん！！」
「だから『死んでも恨まないでね』って言ったよね？」
「言ったけど……」
「ちゃんと事前に言ったんだから、いまさら文句言われてもあたしの方が困っちゃうよ」
「そ、そうだよね？」
「なに言いくるめられてんだバカ！　素手でブラックホール作れるワケねーだろ！！　凶器もってんだからテメーの反則勝ちだ！！」
「そ、そうですよね！　あたしの勝ちだ！　あはははは！」
「それは今の大学女雪相撲ルールだよね？」
「そうだけど？」
「あたしの方だと、ルールの範囲内なんだけど」
「……そうなの？」
「うん」
「じゃあ仕方ないか……」
「仕方ないわけあるか！　もう何でもいいからサッサと決着つけてここからオサラバするぞ！」
「それって……負けてもいいって事ですか？」
「い――」
「大輪女子は不敗！　勝てっ！　侘助っ！」
「鬼百合さん！！」

　……うん、小百合さんが１階と２階の４人を担いで昇って来てくれたの。
　あたしを応援する為に♪
　ってなったらさ、もう負けられないよね☆

「でも、こいつブラックホールなんか投げてくるんですよ！？」
「勝てっ！」
「でも……」
「勝てっ！！」
「…………」

　ここが女の見せ所♪
　あたしも気合い入れ直したんだ♪

（勝ち負け以前に、あたし、死ぬかも）
「どうしたの？　こないんならまたこっちから行くよ！」
「ま、待って！　待ってったら！！」
（どうすればこんなの相手に戦えるんだぁ？）
「必殺！　ブラッ――」
「わーわーわーーっ！！　って！！」

　その時ね、気づいちゃったんだ♪
　組めばブラックホールは使えない、てね☆
　でね、あたし、次のブラックホール張り手の隙に飛び込んだの！！

「だからちょっと待ってってば！」
「待って待ってってうるさいなー！　それじゃ立合にならないでしょ！」
「あのさぁ、ダリアちゃんちょっと眉のラインが……」
「え？　化粧くずれちゃってる？」
「て隙ありぃっ！！　必殺！　人だまし！！」
「あっ！　ズルっ！！」
「ダリアとやら！　ズルイ卑怯は敗者の戯言と心得よ！！」
「そうだそうだ！！」
「ばーちゃんと同じこと言ってるー！！　ええい！　こうなれば必殺！　ゼロ距離ブラックホール張り手ーっ！！」
「え！？　ゼロ距離とか聞いてないよ！　ズルイって！！」
「ズルイ卑怯は敗者の戯言なんでしょ！！」
「それ、あたしが言ったんじゃないよ！？」
「問答無用だってば！」
「ゼロは無ではない！　侘助！　無になれ！！」
「すみません鬼百合さん！　意味が分かりません！！」
「アタシもイミフー」
「ゼロは認識出来ないからゼロと規定される。無はそもそも規定すらされない。……そういうことだ」
「どういうことだよ！！」
「何となく分かりました、鬼百合関」
「流石は雛菊」
「テメェ、ホントに分かってんのか？」
「…………」
「鬼百合さん！　あたしも分かった気がします！」
「なに！？　オマエも適当なことフカしてんじゃねーだろな！？」
「つまりはこういう――」
「なっ！？」
「侘助が……消えた！？」
「――ことですよね！！」
「うわーーーー……」
「って、侘助……あれ？　消えた……あれー？」
「全てを吸い込むブラックホールとて、無いものは吸い込めない。故に侘助は勝った」
「だからどういうことなんだよ！！　科学的に説明しろよ！！」
「そういうことだっ！！」
　バシーン！
「いっつー……小百合、今のはゼッテーごまかしのビンタだろ」
「科学が万能などとは人間の奢りだ。勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負け無し」
「はいはい、もうそれでいいよ！　んで、さっさと逃げよーぜ！！　このままじゃ塔と一緒に焼け死んじまう！！」
「待て。その前にやることがある」

　小百合さんったらさ、みんなが危ないっていうのにあたしに負けてグッタリしてるダリアちゃんを立たせるとバチーンって一発ビンタ張ったんだよ♪

「技に頼り過ぎだ。心を磨け」
「ど……どすこい……」
「どうした。泣く程痛かったか？」
「違います……今のビンタ……ばーちゃんとソックリで……懐かしくて……」
「良き祖母を持ったな」
「……ごっつぁんです！！」
「小百合！　そういうのいいから！　今やる事じゃないから！！　早く脱出しないと！！」
「み、三ツ葉黒関、階段から火が……」
「んじゃもー窓から飛び降りるか！」
「皆さん、大丈夫です」
「ドコが大丈夫なんだよ！　言ってみろこのガキ！」
「実はあたしたち３人、未来から来たんです」
「未来だぁ？」
「はい。だから一度、ここのみんなで未来へ行って、それから安全な場所に戻せば大丈夫です」
「わかったわかった！　わかったから早く安全

なトコに連れてけ！」

「……あれ？」
「日本の未来ってずいぶん閑散としてんだね」
「閑散ってレベルじゃねーだろ。これ、砂漠だよな。エジプトに来ちまったんじゃね？」
「いえ……あれ？　日付のセットも合ってるし、場所も国立だし……あれぇ？」
「お、鬼百合関、これは……」
「皆、落ち着け。まずダリアとやら、設定は間違いないな」
「ど、どすこい。場所も時間も、あたしが元いた世界です」
「しかし見慣れぬ光景が広がっている」
「……どすこい」
「ふむ」
「『ふむ』じゃねーだろ！　タイムパラドックスだよ！　こいつらが未来から来ちまったから元の未来が変わっちまったんだよ！　どーすんだよ！　タイムマシンのない未来になってたらアタシら帰れないんだぞ！！」
「ダリアとやら、元の世界の名残はあるか？」
「……全然ないです」
「ふむ」
「小百合さん、『ふむ』じゃないですって！　日本がこんなになっちゃうなんて！！　あ！　きっとアセンションですよ！！　アセンションのせいでこんなになっちゃったんですよ！！」
「あ。そか、アセンションか。あれって2012年だっけ？」
「確かそうです。テレビで見ましたから。関なんとかが言ってました」
「や、でもコイツが元いた世界は普通だったんだろ？」
「普通でした」
「個人が小型ブラックホールを自在に生成できるのは普通じゃ無いと思いますけど……」
「普通でしたよ？」
「そ、そうなんだ」
「あ！　もしかするとすでにコイツが元いた世界っつーのがそもそも別の平行世界で、ここもさらに別の平行世界ってだ――」
　ベチーン！
「っつーー！！　なんだよ！　なんでいきなりビンタ喰らったんだよ！！」
「理屈をこねるな！！」
「理屈じゃなくて現状把握だろ！！」
「三ツ葉さん三ツ葉さん落ち着いて下さい！　ほら！　なんか車来ましたよ！！」
「おっ、ホントだ！　おーい！！」
「って、大丈夫ですかアレ。なんかモヒカンの人が乗ってますけど」
「侘助、寝ている4人を起こせ」
「ど、どすこいっ！」

　……うん。なんかね、変な……誰も知らない未来にいっちゃったんだよ。

斜塔編　完／未来変序章　完

■みんなで生き残ろう！　女雪力士物語

　マッドマックス～サンダードーム～ばりの近未来へ来てしまった彼女たちのこの先を決めてしまおう！
　今回の募集項目は以下の通りです。

1：車に乗ってやって来るモヒカン軍団は善人か悪人か
　遠目でモヒカンに見える奴らの性格を善悪の二択で明記しよう！
2：モヒカン軍団を率いているのは誰？
　モヒカン軍団を率いているのは誰か明記しよう！
3：モヒカン軍団のリーダーは本人か末裔か
　2で決めた人物本人か、あるいはその末裔かを明記しよう！

※回答結果は次回の当コーナーに反映されます。投票数の多い結果を採用します。
※このコーナーでは基礎投稿点1点の他、今回は回答1項目につき1点が加算されます。



紫影のソナーニル　『1908：雨の日』

■１９０８年、某月。一輛だけの地下鉄■

……水滴。水滴。水滴。
……水音。水音。水音。

とても、とっても、リリィは不満だった。
外に出たいのに。
一輛だけの地下鉄は空を走っているから、すぐに外へ出られないにしても、窓を大きく開けて外の空気を吸いたいのに、それさえもできない。
なぜって、雨。
青いはずの空はどんよりと曇って、雨、雨、雨。
雲の上を走ればいいのにとリリィは言うものの、A曰く「海を見るために高度を下げてしまったからね。今、雲を突っ切れば雷の中を走ることになる。あまり、お勧めできないな」とか。
そういう訳で、きょうは雨の日。
窓辺に寄りかかって。
肘付いて、頬杖付いて。
不満を全身で表現しながらリリィは恨みがましく雨のつぶてが当たり続ける窓を見つめる。窓の向こうの灰色を。
「……雨、やまないかな」
溜息。
きょうだけで、もう、何度目の息を吐いてるんだろう。
楽しくない。
嬉しくない。
でも、怒ってる訳じゃない。
悲しかったり寂しかったりもしていない。
……寂しい、というのは近いかも？
雨が降り始めてから、誰も、遊びに来てくれない。
マオも。
黒くて小さくてぐねぐねした何かも。
（Aはスモール・ホラーとか言っていた）
黒くて小さくて赤い目のついた何かも。
（こういう感じのもの→　【<●>】　）
まるで、雨が、一輛だけの地下鉄へ訪れる誰も彼もを遮っているかのよう。そう思ってしまうと、なんだか腹立たしい。勿論、海が見たいと言った自分自身の責任では、あるのだけど。
「ね。A。ちょっと寂しい」
「僕では足りないかい」
「そゆんじゃなくてさ」
ひとりっきりの寂しさ、では、なくて。
ふたり寄り添う温かさ、では、なくて。
それとは違う話。
頬が熱くなりかけてしまうのを、窓向いたまま誤魔化して、リリィはぽつぽつ言葉を続ける。
「空が暗いと、なんだか、元気が出ないっていうか」
「灰色雲の下であるからには、そういうこともあるだろうね」
「雲の下だと、みんな来れないの？」
「そういうこともあるかも知れない」
「なにさ、それ」
「ああ」
「いつもみたいに、きみの望む通りに、とか」
「……」
「A？」
返事をしないAは珍しい。思わず、振り返る。
こちらを見ている彼と目が合った。
背の高い彼。
赫い瞳の彼。
「なんで黙っちゃうの」
「……」
「Aってば」
「地上に近いということは、現実に近しいということだ」
「？」
「無理をしてはいけない」
「？？」
――現実。無理？
――何、言ってるんだろう？

■１９０２年、某月。私立制高等学校■

「あん？　雨の日は憂鬱かって？　あー、ま、そうかもな？」
「あんまりぴんと来ないって顔してるわねー」
「そ、そんなことないぞ」
「んー。わかった、ありがとセルヴァン。ね、エリィ、男子の平均値としてはこんなものなんだと思うわよ」
「先生も、そうなのかしら……」
「大人なら勿論多少は違う――って言いたいとこだけど、あの先生は情緒とか風情とか、そういうところは若そうだなーって」
「先生ね、えっと、空のことは好きみたいなの」
「そうなの？」
「うん、多分……」
「なあ、何の話だよってば」
「いいの。こっちの話」
「天気の話でいいのか？　俺は別に、雨でも、普段通りの曇り空でも構わないけどな。どっちだからって特別何か不満に思う必要もないだろ。どうしようもないことだろ。雨だとあんまり遊べない、とか子供の頃は思ったけどさ。でもまあ、考えて見りゃ普段読まない本だって読むいい機会だし。そのぶん、雨が引いたら子供はみんな外出て思いっきり遊ぶ訳だし、なあ」
「……へー」
「……うん、うん」
「ふたりとも、何だよその反応？」
「意外だったって話。そうね、男子も結構考えてんのね」
「何をだ？　で、結局何の話なんだ？」

■１９０８年、某月。一輌だけの地下鉄■

結局のところ——

リリィ・ザ・ストレンジャーの不満の理由はひとつだった。

雨が降っていても、降っていなくても、一輌だけの地下鉄の中で出来ることは限られていて。そこに大きな不満を持ったことはなかったものの、今、こうして退屈を感じてしまうのは、やっぱり外のことが大きい。

外に出たい。

Ａも、構わないよと言ったのに。

夢を渡って（いまのリリィ自身とは違う姿で）どこかへ行ったりする訳でも、ふかふかの雲の上に出る訳でもなく、この翠の服を着た姿のままで、外に出たい。

地上をこの目で見てみたい。

地上をこの姿で歩きたい。

そう、思うのだけど。

きょうは、雨だからできない、とＡは言う。

「空との接続は重要だ。きみを地上で見失う訳には行かない」

「？」

「雨の日は、いけないということだよ」

「ちぇ……」

窓硝子にひとさし指を当てる。

ぼんやりした白っぽい露で覆われた窓は、ちょっとしたカンバスのようなもの。指先は筆。

つるりと撫でると、線で絵が描ける。

描いて、消して。

はーっと暖かい息を当てて、また窓に白色を作って。

また描いて。また消して。

「何を描いてるんだい」

「なにって、カエルだよ。似てる？」

「恐竜（ダイノソア）ではないんだね」

「うん？」

「いや」

（つづく）



●ファンディスク『Steampunk Full-voice Fandisk』好評発売中

●『紫影のソナーニルWebノベル』好評掲載中
詳しくは弊社ホームページ　http://www.liar.co.jp/
もしくはシリーズ・ポータルへ
http://www.steampunkseries.com/

●本コーナーではお便りを募集しています。ご感想、ご要望などを「fc@liar.co.jp」までお送り下さい。ポイントもつきます。

花魁春秋

紅を塗った唇より吸い口が離れると、火皿よりたなびく細い煙も揺らいで、開け放たれた窓よりのぞく満月に、まるで絡みつくようにすり寄っていく。
「おーつ、いかがです、旦那様」
細く白い指で支えられた煙管が、客の男に差し出される。
「ああ、いただくかね」
男がそれを受け取り、自分の口へと運ぶ。火皿より立ち上る煙は一時、細く薄くなり、代わりに小さな炎が瞬くように。
「ふぅ……」
男が吸い口を離し、長く息をつくと、氷笹はその手から煙管を受け取った。煙草盆に置かれた灰吹きの縁を軽く叩き、その中へと灰を落とす。部屋の中に響き渡った軽い音は、まるで鹿威しを思わせるよう。
「ああ、うまい。お前さんが選んだ煙草はクセはあるが、また吸いたくなるね。これはどこのヤツだい?」
「ふふ、それは秘密ですよ、旦那様」
「やれやれ、吸いたくなったら上がってこいってことか。また高くつくもんだ」
「そんな文句、受け付けませんよ、旦那。煙草を吸うためだけに来てくだすったわけじゃないでしょう?」
「まったくだ」
窓のそばに座る氷笹が背負うのは、中秋の名月。青く冴えながらも部屋を照らす。大紋日であるこの日に太夫を相手にする男が、煙草代に困っているはずもない。それでも。名にし負う花魁から差し出される煙管をふかすのは、江戸の男にとってもっとも高価な一服と言えた。
「吸って一両、女に二両、たなびき煙る、朧月」
氷笹と、そして月を眺めながらの男の口からでた言葉には、酔いまかせた節に乗っていた。
「あら、お上手」
「いんや、駄作さ」
七七七五と言葉を刻む都々逸を、即興でひねり出したか、あるいはどこから拝借したか。どちらにせよ、月と氷笹を見てふと口から出るあたり、この客もなかなかの洒落者なのかもしれない。それでも、野暮よりは百倍ましだし、こうして大紋日に自分のもとに足を運んでくれるのだから、金払いも悪くない。つまり、氷笹としてもお気に入りの客だった。いちばんに誘いの文を投げるくらいには。
に、と笑って、糸くずのような煙草の葉をつまみあげ、指でそれをまとめて、煙管の火皿に詰め込む。煙草盆より炭火をとりあげ、火を移し、煙がまた細く上るのを確かめてから、吸い口を唇に押し当てる。すう、と、細く長く息を吸い、そして吸い口を離し……、また、男を見て笑う。
「どうです、旦那様。もう一服」
「ああ、もらおうか」
「それがすんだら、そろそろ床へと参りましょうか。ほら、もう月もずいぶん、高く上ってしまったことだしねぇ」
煙管を持ったまま、氷笹は立ち上がり、男の背に回って肩からその腕を回す。指で支えた煙管の吸い口を男の口に。そして、まだ紫煙の残る唇を男の耳元へと寄せた。

※　※　※

大航海時代にアメリカ大陸よりヨーロッパにもたらされた煙草は、鉄砲、キリスト教などとともに、日本にもやってきました。江戸時代の初期には、幕府はたびたび、禁煙令を出し、煙草を規制しようとしていました。これは、風紀の乱れ、防災上の理由などの他に、煙草の栽培の増加が米の生産を圧迫するのではないかという危惧もあったようです。つまり、それだけ喫煙の習慣が広がっていたということでもあります。
この時代、喫煙の習慣のある女性は、大半が遊女でした。大店の太夫ともなると、全国から江戸に集まった煙草を、自分の好みの味に調合して吸っていたようです。遊女が自分で見繕った煙草を詰め、火をつけた煙管を客に差し出す、そんな光景も夜の遊郭ではありふれた光景だったのです。

江戸時代当時の一両の価値を、現代の貨幣価値に換算することは、けっこう難しいことです。
飢饉の時や、幕末などをのぞいて、一両の価値は、ほぼ、米一石を買うことができるものとして、統制されていました。米の価格だけで換算すると、5キロ3千円として、9万円となります。しかし、江戸時代の米1石は、成人1年分の生活費に換算できます。その点で考えると、一両の価値は50万から100万近くの幅を持つことになります。また、大工などの職人の手取りは金ではなく、銀で支払われていました。この銀の価値もまた、時代によって差が出ます。
このように、一両の価値は、どの観点から換算するかによって大きく変わることになります。なんにせよ、太夫と一晩をともにするというのは、江戸の庶民にとっては現実的な話ではなかったのでしょう。

文交わし
(お便りその他のコーナー)

天音「それでは、今回もまた、皆さんからいただいた文にお返事していきたいと思います」
珠琴「やっぱり、まずはこれからかな? 『確認ですが、今回は本当に氷笹姉さんのイラストですよね?よね!』(あかべこさん)他多数! はい! 今回はばっちり、氷笹姐さんだよ!」
氷笹「まぁ、待たせちまったみたいだしねぇ。ゆっくり楽しんでっておくれ」
珠琴「……なんか、すごい迫力というか……。気合い入ってる……」
氷笹「まぁ、こっちはいつも通りのつもりさ。まぁ、めいびぃ先生の腕か

ねぇ」

珠琴「なんだか、贔屓されてない？」

氷笹「どうだかねぇ。ささ、わたしのことはいいから、とっとと他のお便りにいきな」

天音「あ、はい。前回の珠ちゃんと蛍の話で、いろいろ感想をいただきました。『綺麗なもの、可愛らしいものに心惹かれる乙女心……。そんな眼差しで自分は蛍を見ていて、そのへんをお増姐さんにも解ってもらいたいのに……というところでしょうか。めいびいさん画の珠琴からも、そういった心情が伝わってきます』（セトの教授さん）

氷笹「あはは、そんなもったいつけたものかねぇ」

珠琴「ちょ、ちょっとぉ？　あたしだって、蛍の儚さとかそういうので物思いにふけることだってあるんだから！」

氷笹「どうだか。わたしには旦那様方への文書くのに飽きてただけに見えたんだけどねぇ」

珠琴「確かにそうだけど、そういう時にちょっとだけ、ああいうこと考えちゃったりするんだもん！　こんな感じで！　『籠の中の蛍という内容から、いろいろと連想できて切なくなりました。遊女というとどうしてもドナドナなイメージになってしまいますが、珠琴はその枠に完全にはまらないところが魅力な気がします。挿絵の、蛍を眺める珠琴の表情も近かった遠い場所を見ているような気がして、何とも言えないじーんとした気持ちになります』（カナエ一号さん）」

氷笹「遊女らしくないってところには同意するけどねぇ」

天音「氷笹姐さんもそのくらいで。他にも、こんなお便りもいただきました。『残念ながら環境に恵まれず、蛍というものを実際に目にしたことが無いのですがそれが勿体なくてしょうのない事のように思えてきます。いずれ見に行きたい！』（しのさん）」

氷笹「江戸で売られている蛍は、だいたい近くの川べりで捕られたものなのさ。吉原に来る途中の大川にもいたんじゃないのかね。まぁ、わたしは見たことないけどね」

天音「かわいそうですが、買ってきた虫に餌を与えたりはしませんでした。二日三日の観賞用のものだったんです」

珠琴「切ないよねぇ」

氷笹「だからこその風情ってもんさ」

珠琴「あ、それで、次は誰がイラストになるの？」

天音「どうしましょう。時期的に冬の風物ってことになると思います。吉原のこんな冬の風景が見たいって希望がありましたら、お便りでお伝えしてくれるとうれしいです」

氷笹「前は天音の餅つきだったっけ。次はもう少し、太夫として様になる絵がほしいとこだね」

天音「わたしは、楽しかったんですけど……」

珠琴「それじゃ、今回はこのへんで！　また次の号でお会いしましょう！」



※このページは右からお読みください。

の着物によれよれの袴という書生スタイルだったらしい。その風采を聞いていたからだろうか。わたしは、曾祖母が遺したお酒を携えて、彼女が身籠った座敷を訪れた時、自分より先に部屋にあって、奥の間に続く襖の際に寝そべっていた男を見て、もしや過去から抜け出して来たのかと勘違いしたのは。しかし違った。その男は、曾祖母から聞いた縮れ髪でも、悪相でもなかった。何より、わたしの気配にむくりと身を起こして寄越してきた眸の色が違う。この男の眸は、不可思議な蒼さを湛えてある。飄々として、若いのに老境の覚りにあるような、それでいてわたしを不安にさせる。

「あなた、一体、誰――なぜひいおばあ様のお部屋に」

「勝手に上がりこんだ野郎に、悲鳴もないのは筋がいいな。それともあんたのひいばばの仕込みがよかったか」

「誰かと訊いているの！」

「俺ぁあんたのひいばばの旧い知り合いでな、くたばったと聞いて、その夢の後始末にぬたくり出てきたのさ」

「……ひいおばあ様の、夢の後始末？」

智里、と名乗ってから蒼い眸の男は、襖をすうっと引けば、日頃は人も通わない奥の間の暗がりに、ぼうとスライドのように浮かび上がった映像がある。

――好古の者なら、溜め息をつくだろう、レトロで暗い輝きを満たした酒場の情景だった。若い男女二人が、カウンターで語らっている様子だった。彼らの格好、酒場の調度、曾祖母から幾度となく話を訊いていたわたしには、すぐさまそれがどこなのかすぐに思い至った。そんな情景が暗がりに再現されている不思議より先に、何もかもが曾祖母の話し通りである事に釘付けとなった。

「これ……この景色……ひいおばあ様のお若かった頃の！？」

「だろうぜ。だが何もかもが、その話通りかね」

智里が何を言いたいのか、それもすぐさま了解される。違う、同じなのに、一つだけ違う。決定的に違う――

「違う――違います。あれは、あの女性は、わたしの曾祖母ではなかった……っ。名前だって違う？」

「おおとも。あんたのひいばばな筈ァねえやな。だって、そこにいたのは、違う女なんだもの」

◆　◆　◆

元々は女工だったって言うあんたのひいばばな。その若ぇ頃は惨めなものだったというぜ。あんなブルジョアな銀ブラなんぞに縁がある訳はねえのだ。

――すれ違っただけ、なのさ。

街角で、ほんの一瞬。だがその瞬きほどの間に、心に焼きつけられたらしい。そのつるむ様子が、くっきりはっきり、二人があんまり幸せそうだったからとよ。そしてひいばば殿ァな、ただ苦しい、辛いばかりのてめえの若い頃を、あんな風が良い、ああだったらと、後から全部その空想で埋めちまったわけだ。

なんで、さっと見ただけの二人の事を、そこまで知っている、と？　そらあ、この俺が教えてやったからだ。二人の名前をな。あんたのひいばばの心の中で、二人は名前を得て、ただの面影より、いよいよはっきりした形になっていき――

◆　◆　◆

「それなら、それでいいんだわ。ひいおばあ様にとってはそれで。たとえ夢のようなものだったとしても、それは、幸せな夢、過去の」

「ま、ひいばば殿にとっちゃ、な。だが夢の後始末といったろう。曾孫のあんたには、結びまで言っておかにゃなんねえ。あんたのひいばばの方が、よほど目出度い一生だったと」

「何が言いたいの」

「あっちの二人は――女の方は、孕んだ腹を裂かれて殺された。男の方は、復讐に血迷い鬼となった。畳の上で、孫子に囲まれ大往生の、あんたのひいばばの方が、よっぽどマシだったろうとよ」

そう言いながら、襖戸を閉して、過去の情景を閉ざす、智里の、その言葉がどこからどこまでが真実で本気だったか判らない。それでもわたしには一つ判った事がある。

「それをわざわざ告げに来た、あなたは。

――最低の人、ね――」

――曾祖母の遺した酒・了――



花散峪山人考外伝
——曾祖母の遺した酒——

晩夏の夕暮れを残照は染めたサフラン色に柔らかく、帝都の大通りを心浮き立つような風合いに満たした。街路樹の柳もそのしなやかな枝先を行き交う人々の頭上に垂らして、今宵の歓楽へと誘うよう。

市電の停車場を降りてこの通りに出た時には、何時しか約束事のように立ち寄ることになっていたパーラーで、キネマハウスの、画集のように奇麗なプログラムの、貴方と差し向かいでめくる表紙には、表紙にはポーラ・ネグリというあちらの女優さんの電髪のおすまし顔。この月の上映は、「帝國ホテル」「監獄行列車」「大盗戀の目覺め」の三本で、物騒なの、おかしげなの、タイトルだけでは内容の予想もつかない。私があれこれ見当を喋れば、貴方は言葉少なに、けれども優しい微笑みで頷いてくれて。

近頃メニューに並んだ「どりこの」という外国めいた響きを持つ飲み物の、甘やかな味わいは、すっかり私のお気に入りになった。

ただ、私の心がこんなにもはしゃいで、幸せで満たされているのは、キネマのストーリーへの予感や、冷たい飲み物の美味しさのせいじゃない。帝都の通りの宵闇を、眠りを知らぬげに煌々と明かるませる、ネオンや街灯のせいでもない。

それは——貴方。貴方と一緒にいられるから。二人で歩けるから。街往く人の中には、私と貴方の連れ立つ姿を見てどう思うのでしょう。飾り襟の胸元をカメオなんぞで留めて、いつもはリボンで結わえている髪を解いて一人前にシャッポを被って、洋装に作っている私、ちょっとモダァンに気取り過ぎなのかも。貴方はいつも通りの貴方で、単衣のお着物に着慣れた袴の、住み込みの書生さんのような。縮れ髪で、大きなお口で、その眼差しは慣れないに人には恐い印象を与えてしまう。

でも他の人たちにはどう見えていたって、私には貴方は、ただ一人の、誓い合った、恋人で、だからこんなにも嬉しいのよ、楽しいのよ、一緒にいられることが。

愛しています——冬矢さん。

◆ ◆ ◆

——わたしの曾祖母は、凛とした女性だった。晩年になっても背筋はしゃんとして、立ち居振る舞いに隙が無く、孫、曾孫達の立ち居振る舞いにも妥協がなくって、なのにただ厳しいだけではない。寛容と茶目っ気も併せていたりもして。

曾祖母は、生き抜いてきた重く鈍く哀しい戦争より、彼女が青春を過ごした、戦前の帝都での日々を想い出語りする方を好んだ。私も現在の、自己肥大と露出過多に倦んだような東京よりも、彼女が語る古い街並みの華やぎに魅せられて、飽きもせず何度もせがんだもの。

一繋がりの時間上にあるとは思えないような、まるで幻影の異国のような帝都の風景の活写は、わたしが長じて男女間のお付き合いというものに憧憬を抱くにつれ、やがて曾祖母の、その頃の恋人との逢瀬も交えていくようになり——今では古い映画でしか見られないような世界に私も夢中になったものだけれど。

けれど、けれど。

彼女が語る日々は、瓦解前の華族、富裕階級の令嬢の暮らしぶりを彷彿とさせたし、曾祖母の物腰も、いかにも洗練されたものだったけれど、わたしはいつしか知るに至ったのだ。

曾祖母は地方から女工としてさらわれるように上京してきて、後は貴重な花の盛りを工場と寮の往復で過ごし、給金など僅か、故郷への仕送りにほとんどを費やして、食うや食わずの日々で、遊ぶ暇もなかった筈、大体曾祖母とその良人（つまりわたしの曾祖父）とは戦中の見合い婚で、その語るような恋の小径など縁もなかったはず、と祖母から聞かされたのだ。

それでも、曾祖母が語る「想い出」は微に入り細に入り、伝聞や書物だけで知ったとは思えないほどの情感も籠もっていて。だからわたしは、彼女が嘘偽りを語っているとは、その今はの際まで、思えなかった。

——ああ。私も、じきに死ぬよ。

——お聞き。書斎のね。「黒猫」、そう、ポーのヴェラム装幀の一冊がしまわれている後に。

——一瓶の洋酒が隠してある。

——それをお前にあげよう。

——私が、あの人と、初めて酒場で呑んだお酒と、同じ銘柄なの。

——お前もそろそろ、佳いお酒を知っておくべきだからね。

座敷から主治医や家の者達がいなくなった際を見はからって、曾祖母は呪文のように長ったらしいそのお酒の名を、流暢に囁いてのけたし、顔色だって穏やかだったのに、その夜に、眠るようにこの世を去った。

◆ ◆ ◆

街の片隅のビルヂングの、外目からは商会か事務所くらいにしか思われないその二階。けれど中に入ってみると裏腹な、豪奢なもので東と南に向った二方窓、二方壁の十坪ばかりの部屋に、艶やかな弧型マホガニーの立ち飲み台（カウンター）、巧まぬ粋で配された小卓には、ビーチパラソル型電気スタンド、木枠正方型巻上大時計。片隅には風変わりな花めいた蓄音機に、頭上には絹紐煽風機、そして薄暗がりのカウンターの奥には灯りを弾く数々の酒瓶と、看板も出していないのに、ここはBARなので。私は初めて入るお酒を飲む処に、ぞくぞくするような昂奮と好奇心を覚えていて、大いなる冒険の気持ちでいる。緊張や、不安はない。だって一人じゃないから。冬矢さんと、彼の親友である椿さんまでいてくれている。二人の間で止まり木に腰かけた私は、騎士に守護された公女のよう。

……もっとも、冬矢さんはまだ困り顔だったけれど。

「いいのか、これは本当に。君をこんな盛り場に連れてきてしまって」

いいのよ、貴方。だって私が是非にと頼んだのだもの。私が我が儘を言って、貴方はそれを聞いてくれただけ。お父様にだってそう言うわ。

「ま、観念したまえ伊波。考えようによっては、こういう機会を経験しておくのも勉強だよ、なんだったらもっと場末のキャバレーにでもご案内するのも一興で」

「やめろ、この人の前でそういう事を言うのは。お前は何時もそう無責任な……」

唇に笑みを含んで軽口の椿さんを、冬矢さんは憂鬱そうに一睨みしたりする。口振りはそうでも、冬矢さんが彼を深く信頼しているのが感じられて、ちょっとだけ羨ましい。

「責任を感じているからこそ、君と千種嬢の間にのこのこついてくる、なんて不粋をやってるのだがね」

「有難うございますね、椿様。冬矢さんも、私、貴方とこの方がいてくださるなら安心だわ」

……本当は、それも私の我が儘。親友同士の殿方の間だけに生ずる、気心知れた世界というのを覗いてみたかったのよ。

「それに、とっても素敵なお店。冬矢さんは、男の人たちは、いつもこんな佳い処に隠れたりしているのね」

「いや、この店は、椿が見つけたんだ。恥ずかしい話だが、あの時は二人とも酷く酔っていて……」

「良いじゃないかそんな事は。そろそろ頼もう。うむ、千種嬢には、まずはシェリー酒などがいかがだろう」

さらりと流した椿さんに、唇をへの字にした冬矢さん、それでも私とお酒の列を交互に眺めてから、

「そうだな……マスター、バルデスピノのアモンティリャード・マンサニージャ、二五年はあるだろうか」

「マンサニージャの二五年モノって伊波。君は相変わらず酒と食い物に関しては、思いきった真似をするよな」

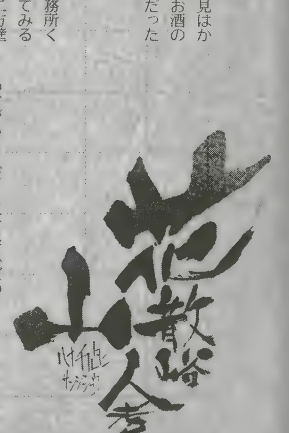
一瞬呆気に取られた風の椿さんへ、冬矢さんはむしろ不思議そうな顔をした事だった。

「何を言っているんだお前は。初めて外で飲むのなら、美味い酒の方が良いからに決まっているだろう」

やがて注がれたお酒は、細長いグラスの中で、液状のインペリアルトパーズのようで、私がそれまで聞いた最上のお香と同じくらいに芳しくて、そしてそれまで味わった事のないくらい、濃いのに、軽やかで、甘いような、酸いような、木の実の精髄のような風味で、とにかく得も言われぬ位美味しくって——

◆ ◆ ◆

そしてそんな夜でも、その伊波冬矢という、曾祖母の情人だった人は、椿という伊達な親友とは対照的に、単



九星時報

第2回 ☆☆☆





夏合宿は女を変えるユリトピア！ 屋上の百合霊さんコーナー２回目です。沢山の投稿ありがとうございましたの、祝・増ページ！ では、どんどん紹介です。

■PN＝Tagosaku

百合霊のお二人へ。お互いのこういう所はイヤ!というのがあれば教えてください。（結局最後はイチャついて締めるのでしょうが・笑）

サチ「ないわ。ね、恵」
恵「ありません。ね、サチさん」
サチ＆恵「ねー」
結奈（最後もなにも、イチャつきだけで始まって終った!）
恵「当然でしょ」
結奈「いつの間に読心できるようになったのよ」
恵「このくらい勘で判りますー」
サチ「ふふ。では、結奈さん次の投稿お願い」

■PN＝もっち

結奈のキッチン周り、使っている道具などを見てみたいです。そんなに変ったものがあるわけではないだろうとは思いますが…

結奈「必要なのは一通り」
阿野「包丁とかもずらっと?」
結奈「一応あるけど、使ってるのは三徳とペティくらい。どこでもなんでも使えるわけじゃないから、普段の道具は絞ってる」
阿野「じゃあ、今、一番欲しいのは?」
結奈「大型オーブン。学食のとは言わないけど、阿野んちにあるのくらいは……」
阿野「遠慮せずに使いに来てくださいな。お母さんも喜ぶし」
比奈「お肉焼く?」
阿野「いいよん。比奈ちゃんもおいでー」
比奈「ん」
結奈「オーブンで肉料理か……」
阿野「楽しみー。さて、次の投稿です。放送部任せたよ!」

■PN＝みみっく

音七さんのことを知りたいです！ いったいいつ眠り姫になってしまったのかとかお気に入りの洋服とか好きなゲームや漫画とかいっぱいいっぱい知りたいです～

羽美「同じ質問、多数あり!」
沙紗「人気だな。出会った時には、すでに眠り姫だったよな」
羽美「アルバムだと、小４くらいまではパッチリさんだったよね」
音七「その頃に色々バランスがとれたんだよ。睡眠癖は生まれつき。死んだみたいに寝るから親も心配したみたい。だから、今の状態は親孝行?」
羽美「なるほどー」
沙紗「いや待て、なるほどじゃあないだろ」
羽美「そう? あとは、えっと、好きな洋服とか……」
音七「待った。そろそろ次の投稿に渡す時間～」
羽美「う、残念! また今度聞くからね!
じゃあ網島先輩お願いします」

■PN＝日下部峰雪

茉莉と美夕の校外デートとか見てみたいです。水族館とか好きそうな気がするのですがいかがでしょう。

茉莉「確かに美夕は水族館好きだね。シャチショーの時は面白かったよ。あの芸が出来るまでにどんな努力したんだろう。自分も部活頑張るって興奮してさ、本当にかわいいよね。帰りにはシャチのヌイグル……」
美夕「茉莉だって、ペンギン帽子買ってたじゃない」
茉莉「うっ……まぁ、あとで思い返すと恥ずかしいこともあるけど、やっぱデートは楽しいね。いつかお見せできるといいな」
美夕「いつかね。じゃあ、次の投稿をどうぞ」

■PN＝カナエ一号

百合霊さんと言えば“ユリトピア”の言葉がハマりすぎていると思うのですが、生まれたきっかけとか思いとかがあれば知りたいです。

元はサフィズムの舷窓のキャッチコピー考案時。杏里が言いそうな事というメモを作成、その中にあったのが、これです。

スペースが残り少なくなってきました。あかべこさん、浴衣は雑誌コラムで少し載りました。残りのキャラもいつか必ず！ ユリトピアン３世さん、どっちのショーが見たいのか決めて下さい！ その他の皆様もありがとうございました。
さてさて、このコーナーでは投稿を募集中！
 Ｐｅｇさんに描いてもらいたいイラスト、各キャラに答えて欲しい質問。妄想、自作イラストなど、お気軽にお寄せ下さい。お待ちしております。では最後の投稿をお届けしつつ、また次回!

■PN＝taku

阿野ちゃんきゃわわ

阿野「な、なんだよー」
桐「きゃわわ！」

星継駅擾乱譚

星継駅擾乱譚外伝
——ア行からア行へ——

そこは、隠し通路というのは迂遠な言葉と述べた方が適切な、大人の男では腰を屈めて通るのがやっとというくらいの狭苦しい空間であり、その青年などは早々に歩く事を諦め四つん這いとなってにじり進んであった。ただただ青年は、先に待っている筈の悦楽への予感とおつむの中が満杯で、暗い穴の中で進退窮する事への恐怖など締め出されてあった。きっとこの先には、夢のような女の肌と柔肉が、自分の為に身綺麗にして待っている。彼にとりそれは決定事項で、為に股間では陰茎が長子の如く突っ張らかって鈍痛覚えてしまうくらい。更なる熱意でもっていよいよ遮二無二這い進む青年の手が、それまで掻いていた床面を見失ったのか突如として。胴も障も物もなく、全身が失墜感に体重を無くし、落ちゆく先は闇、底も知れない暗闇。墜落の最中になってようやく青年は、もしやこの俺は、こんな嘘っぱちの道を教えられるくらい、あの子を怒らせてしまっていたのか知らん、などて暢気に推量し始める始末で——

——

◆　◆　◆

この助平で情けなく、およそ世の中の駄目男のコンテストなどを開催したならその存命中は首位を独占する事請け合いの、青年の名を馴屋直也という。船乗り仲間で悪名高い事で知られる艦護船、信天翁号の二等航海士であり、同船が大河を遡って『駅』、大地上に屹立する、一つの都市級の規模と、迷宮並みの混沌とで知られる駅まで交易という建前のの下に、駅内の運河に停泊して数時間。ようやく半日ばかりの休暇を獲得し、逃げ出すような勢いで離船して「駅内」に探し求めた先は、有り体に言えば女郎屋である。

だが彼が見聞してきた様々な異郷の、どんなバザールやカスバにも勝る、無駄に複雑で猥雑な、『駅』内の構造と建築物の積層の中で駆けずり回った挙げ句、馴屋は完全に自分の位置を見失ったのである。建築物ばかりか両脇からのしかかる、谷底のような土産物屋街の中で、前を見て後を見て、途方に暮れて獣欲を持て余す馴屋が、街角に佇んでいた小柄な女を認め、飛びついていったのは、道を訊ねる為もあったし、あわよくば口説いてやろうとの邪心もあった。が、目の前に立ってみれば女は、小柄というより単にまだ少女であったので、女とあれば見境のない彼だが、基本少女性愛の嗜好はない。その馴屋にして、ウラジミール・ナボコフ的な衝動に駆り立てる程であった。なんとなれば少女は、稀有なほどの美と典雅な佇まいを具えていたから。不思議な金属光沢の頭に銀の髪、を古風な面紗が取り巻き、華奢な肢体を夜の色の古風なドレスが包む。少女へ問うた言葉が、

「こんにちはとっても綺麗な君。君はここの『駅』で、綺麗なお姉さんとセック……ええと、肉体的な、その、大人の付き合いが出来るような酒場とか宿とか知らないかなー?」

浅ましい。もし周囲に駅の公安などがいようものならしょっ引かれかねないところだったというのに、少女は馴屋を端然と見上げ、彼をして、ああこの子があと五年、いや三年したったら一週間でちんちんして泣いて頼んでやらせてもらえないか口説くのにと内心歯噛みさせたくらい美しく唇を綻ばせてから、

「お前さま、それはこのわたくし、『駅の案内人であるヒプノマリア』にお訊ねなのでしょうや。それとも『河の下のヒプノマリア』に問うておられるのかや」

またその口振りが、厳めしく古めかしいのにすこぶるつきの美声で、馴屋はあっけなくのぼせ上がり、彼女の符牒めかした問い返しの意味を考えるどころではない。がくがくと頷くばかりの馴屋の手を取って、ヒプノマリアなる少女は、青年の掌へ、

「心得ました。お前さまのお望みのところへは、こう——この道筋をお進み、『裏』通りまでお出でなさいませ。本当ならわたくしが案内差し上げるべきなのじゃが、どうやらそうもいかず」

指先でなぞりつけた少女の爪の先の刺激だけでも馴屋はもう色々大変。まずはあちらの方角に、と指し示された先へ、走り出したが勢いの凄まじさ。

そうして、少女が指すがまま、教えられた土産物屋街の突き当たり、複合建築の多層モールに突入すると、その四階まで一息に駆け上がり、建物内の東側、立ち食い蕎麦屋と店仕舞いした骨董屋の間の通用路になだれ込んで、その終端の梯子から壁面に設けられた四角い通路に潜りこんだ。どれだけ距離を稼いだやら、考える前に馴屋は床面を破って墜落した。

◆　◆　◆

——きしきし、かたかた鳴る木組みと金属の響きが規則的に、そのゆったりとして弛みないリズムに、馴屋はぼんやりと覚醒していくと、どうやら彼は木造の小さな小屋の中、畳一畳分ばかりの板敷きの小上がりの中に仰臥しているらしかった。片田舎の停留所じみた小屋の中を、穏やかに照らす角燈の灯りが懐かしい。ただいささか奇妙な事に、小屋の中には小上がりの向かいに自転車めいた器械が据えられてある。だけならまだしも、それは今、規則正しくペダルを漕がれてある。こんな小屋の中で自転車を漕いでどこへ向かう気なのやら、と胡乱げに見つめる馴屋の意識が止まったのは、その漕ぎ手の背に流れる銀色の滝が、別れたはずの少女の髪と見て取ったから。衣装はあのドレスから、この『駅』の駅員達の制服に替えていたけれど、その可憐な肢体、見まごうはずも無しと跳ね起きれば、途端に小屋がぐらり、大きく傾いで馴屋は板壁に縋った。

「お目覚めか。なれど声を立てる、上係でなされる事なき様。この吊り籠は、もう随分と古うございます。客はまだまだ上部ですが、それでも万一の事もあります故」

鷹揚の様に甘い声に、渋々と、大人しく小上がりから少女の脇に降りて覗きこめば、やはり先刻のヒプノマリアの。小屋の前部、三方に設けられた木枠の硝子窓から周囲を覗えば、暗闇模糊たる暗がりが囲繞して、しかと様子を把握しかねる。

「ここは……? こんなに暗い。君が教えてくれた通り進んだのに、俺は、横穴から落ちちゃって——それで……長い事、気絶とかしてた?」

「いいえ。お前さまは正しく進んでおられました。気を遠くしていたのも僅かの間」

制帽を直しながらヒプノマリア、やや[illegible]を傾けて、

「して、ここですが。ここは、『駅』のあらゆる建物の、通りの、裏。通りには表があれば『裏』もありましょう」

「そりゃあ道理なんだが、建物の裏っ側、裏通りと言うからには、なんだか周りは夜空も見えているような」

馴屋の見た限り、小屋の周囲は夜に満たされ、遥か彼方には幟旗、群雲もなびく。『駅』は建築物のその地表を覆い尽くされ、このような空を眺めるにはよほど高所に上がらなければ叶わぬだろう。

「こんな高みを裏通りと言われてもな。ああそうか、吊り籠って言ったっけ。ええと、ロープウェイみたいな奴だろ?」

左様、かつては山中の渓谷間に張り渡されていた事もある、足漕ぎ式の索道。ヒプノマリアが漕ぐ自転車式の器械には車輪が無く、動力は小屋上部の滑車と動輪へ伝えられているらしい。

「お言葉の通り。けれどもここはやはり駅の『駅』の裏通りなのです。下をご覧遊ばせ」

促されるまま下方に目を転じれば、やがて暗がりに目も慣れて、眼下には『駅』の情景をより戯画化したような、一種異様な風景が広がっていたのである。あちこちに数階建ての民家がある。ビルとも塔ともつかぬ構造物が延びている。その隙間や谷間は、余すところなく活用され、商店通りであったり連絡路であったり、まるで[illegible]の如く、もう見ているだけで眩惑されそう。吊り籠は、次第に高度を低くしてその奇妙不可思議な「裏通り」の中へと押し進んでいくのである。そうやって近づいてみれば、行き交う者は一様に人

聞あれは、明らかに異体異様の姿の者しか……
「なんか、妖怪じみた者があちらこちらにいない？」
「ほらん、でも、彼の者達も普通？妖怪じゃ！」
「本当か──俺、取って食われたりしないよな？」
「無論の事、このわたくしの案内です。お前さまに滅多な事はさせません」
自分よりずっと年若な少女の言、なのに慈愛に満ちた頼もしさに、剛屋、めにまず安心して、ヒブノマリアの導くにまかせた。
安心した、と思えば剛屋の鼻孔をくすぐるのは、ヒブノマリアの薫りなのさ。仄かで、爽やかで、なのにどことなく雌を匂わせてる。ただでさえ性欲を持て余していたところ、こんな良い匂いを間近で嗅いでは、いかにヒブノマリアが少女のなりをしているとはいえ、この頃では彼女は剛屋にとって、甘えたくなる女性としての用が確立されており、そこに性の悶々が加わった。
「あの、君がここへ案内してくれるのが、間違いないとさ、暫く吊り船、留めておかれないだろうか」
首筋へ鼻先を寄せて、匂いを吸いこみながら囁くのは、案内へするより近しさが過ぎた。肩へ手を置いたのだって、馴れ馴れしい、ふしだらな触れ方。そうされて、しかしヒブノマリアは咎めるでもなく、ただ胸間いた目に見上げるばかり。それも男の欲情を了解して、受け容れるような。
「お前さま、「河の下」のわたくしの海上で、待つのも待てませぬ、と。ふふ、確かに殿方はそうなってしまうと、どうしようもなくなってしまうもの」
「ああ、吊り船が落っこったりしないよう、なるべく静かにするから」
「いけない殿方です、そうまで求められては、わたくしも、いけない心地に──」
これはもう合意、と見て胸元に滑りこませてきた剛屋の手に、少女は愛おしげに掌を重ね、けれど囁いた言葉は、
「なれど、わたくしの準備が出来ておりませぬ。本来であれば、湯浴って床を整えておくつもりでした。もう、そんな顔をしては駄目。わたくしがまたでし、セルダクララに報せてあります。今日は我らかたわれと、お楽しみあれ──」
と、身を起こり、剛屋の肩を押し戻したのは軽い力であったのに、逆らうもならず彼の身体は後にのめって、小上がりに尻もちを、着くはずなのに、その尻が、堕ちた。
貴方から墜ちた時と等しい失墜感が、今一度剛屋を捉え、また墜ちていく、前後左右もない闇の中。

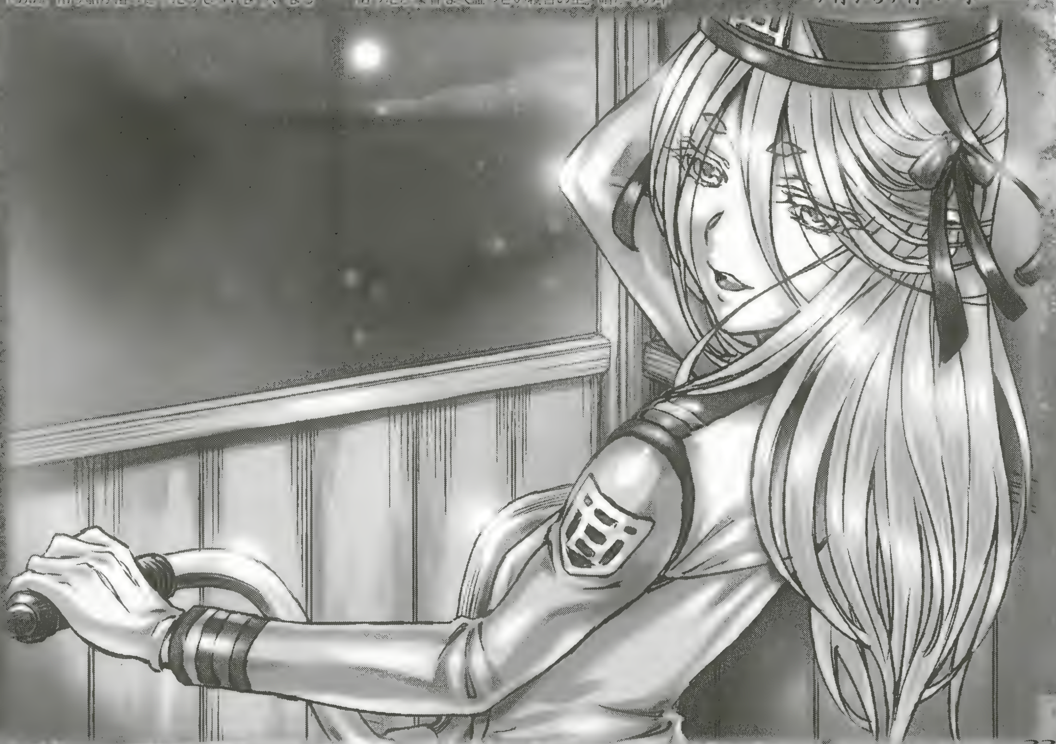
◆　◆　◆

わあ！ と叫んで剛屋は、墜落から逃れようと必死で振り回して掴んだ手にただ縋った。
「……痛い」
返ってきた声は、ヒブノマリアのもので、否、異なった。柔らかな彼女の声よりやや生硬な。手を引かれたなり、身を乗り出して膝をつく姿し、あのドレスとも制服とも異なる、シックなスーツ姿で、顔立ちだって、まったく同じ、なのに風情がどこか異なる。見回せば、ここはやや黴臭くはあったが豪奢な天蓋つきの寝台の上。暗がりの中に角燈の光の輪で柔らかに照らし出されてる。
「ここは、吊り船は？ 君、ヒブノマリア？」
「違う、私はセルダクララ。かれとは双身。そしてここは駅の「河の下」で、我等の住まい。貴方の話は知らされている。今日のお客様だって。それなら、楽しみましょう？ お会い出来ぬのと、その分以上の時間としてあげたい」
「ちょ、君、そんな、いきなり」
言いながら剛屋の脚の間に身を滑りこませ、ズボンのベルトを解きにかかったセルダクララの早手回しに、剛屋は一応抗っておれど、容易に押し流された。
「貴方は、お誰？」
見上げてきた眸、無機質の金属光沢なのに、そこには好意を撥ねつけられたら、という懸念が揺曳していて、それが本意なのか娼婦の手管なのか、判別付きかねたくあったが、剛屋はこういう目は拒めない。だから、双子の片割れには次抜れ出た淫靡に湿った響きが、すぐに満ちた。喘ぎと嬌声を伴って。

◆　◆　◆

かくして「駅」の双子の少女の貌を表も裏も知って、剛屋は時限きっちりに、天翁号に戻ったわけなのだが、この性欲過多な青年をして、以降数日間は同僚の女航海士や闘長けた女客の身体が接近してもぴくりとも来ないほど、消耗し尽くした感もあったとか。

──ア行からア行へ・了──



山城国――

京の三条を出て東山を越え逢坂関の手前、二人の男が道端で休んでいた武家へ渋い顔を見せる。

「逢坂まで行って聞いてきたんですよ。やっぱり娘っ子は来ちゃいねぇって」

「こっちにとっちゃ大事な商売道具なんだ。そろそろ出してはくれませんかねぇ」

ところがその武家、傍らの小姓へ顔を向けると、

「そうは言われても、知らぬものは知らぬ。なあ権六」

権六と呼ばれた小姓は顔色も変えず微動だにしない。

「武家だからって下手に出てりゃいい気になりやあがって。なんなら手荒な事してもいいんだぜ？」

額に向こう傷のある男が言うと、それに合わせて六尺を越える男が一歩進み出る。

「ほう、儂と事を構えると申すか。権六、一足先に尾張へ戻り戦支度を始めておけ。我が一城を以てお相手仕ろう」

武家が不敵に微笑むと、みるみるうちに大男の顔から血の気が引いていく。

「もしや、織田様で？」

京畿で銭を扱う者は皆、尾張の織田の名前を知らぬ者はいない。何しろ銭の力で従五位下を得た人物である。

「京畿の女衒にまで知られているとは、儂も有名になったものだなあ」

向こう傷の男も事態を察し、途端に下卑た笑顔を見せると、

「彼の織田様でありましたか。であれば……」

指を三本立てた。

「大負けに負けて、これで如何でしょう」

「何が如何か、判らんなあ」

武家は悠々と顎髭を撫でる。

ちっ、と向こう傷の男が舌打ちで返すと、権六は腰の脇差しに手を掛ける。

「無礼であろう。手討ちにするぞ」

大男は向こう傷の男の肩を叩き、首を横へ振って見せた。向こう傷の男はため息一つ。

「知らぬのでしたら仕方ありませんなあ」

二人の男は道を京へと上っていった。

権六は握り飯を頬張る幼女を見ながら、

「宜しかったので？」

主人である武家に声を掛けた。

「袖すり合うも多生の縁。此処で会うのも何かの縁。なあ、娘」

武家の言葉に、幼女はわけも分からないまま頷いて見せる。

「娘、年はいくつだ？」

幼女はまた頷くばかり。

「ふむ……六つか其処いらか」

武家は返答を諦め、自分なりの答えを出す。

「差し詰め何処ぞの河原者の子で、拐かされて来たのであろう」

「此から如何なさるおつもりなので？」

「如何と言われてもな。……娘、どうしたものかなあ」

幼女が武家を見返す瞳は澄んでいて、疑念も怯えも哀願も無い。

「まだ展望も何も持たぬか。されば将来に役立つ術を伝授しよう」

幼女は一つ頷いた。

「先ずは銭。何より銭。此よりは其の様な世の中になる心得ておけ。先だっての女衒づれとて、儂や権六を恐れたのではなく、儂の持つ銭を恐れただけよ」

武家は朝廷と将軍家に多額の寄付をしたお陰で、この度の上洛で従五位下を叙任されたのである。

「銭は不浄、銭より物、などと言われておるが、京畿はすでに銭の世よ。直に日ノ本全て、銭の世となろう。娘、銭さえあれば身売りされずとも済む。判るな？」

頷く幼女。

「ぜに、たいせつ」

「そう。そうだ。銭は大切。銭はあらゆる物と交換出来る。食い物、着物、住み処……人の心とて買うことが出来る」

心と聞いた幼女は、ぴくりと眉を動かし、初めて関心を示す。

「ぜに、すごい」

「うむ、銭は凄い。されど銭は所詮、目的を果たす為の道具に過ぎぬ。凄くて大切な銭を使って何をするか、要は其れよ」

近江国草津――

「随分と熱い湯で御座いましたな」

「ほう、権六も弱音を吐くか」

「弱音と仰るは心外の極み！　この柴田勝家、湯もみなしでもう一度入って参りまする！！」

武家は、まあまあと宥めると酒瓶を傾けて一口すると権六へ差し出した。

「また来たいものであるな」

逢坂関を越えた二人は大津を通り、草津で宿を取った。勿論、温泉が目当てであった。

「次においでになるときは若も御一緒召されるが宜しいかと」

「吉法師は肝が据わっておらぬ。草津の湯など堪えられまい」

この度の上京に際しても、吉法師は父である武家の足元にしがみついて別れを惜しんでいた。

「武家の子に生まれたは不運、か」

「何を仰ります。若は心優しく、また英邁な御方。先だっても――」

「もうよい。其の話は幾度も聞いた」

「ううむ……」

権六は酒瓶を呷ると黙り込む。

「どうした。昼の娘が気になるか？」

「彼で宜しかったので？」

娘が握り飯を食べ終わるのを待ち、二人はその場で娘と別れて帰路についたのである。

「今頃、野犬に食われているのでは」

「馬鹿者、其の様な事があるか。直ぐに女衒共に捕まり、今頃は売られた先の、何処ぞの邸におるであろうよ」

女衒達は少し離れた所で、あの場から武家が発つのを待っていたというのである。

「ならばもし我らが娘を連れて来ていれば」

「諍いとなり、男二人が死んだであろうな。権六は無益な殺生を好むと申すか」

「ならば御屋形様は年端もいかぬ娘が売られるを良し仰りますか」

「少なくとも誰も死なぬ」

「袖すり合うも多生の縁と仰ったではありませぬか」

「多生の縁より今生の縁よ。儂が守る



べきは年貢を納めてくれる我が領民達。娘も女衒も通りすがりの多生の縁であれば、誰も死なぬ道を取りたいものよな」

権六は主である織田信秀という男の怜悧さに改めて心酔する。

（若にも御屋形様の様に育って頂かねば）

◆　◆

●選択肢：まさか食べ物に毒を混ぜたりはしないだろう

摂津国大坂城――

全ては思い通りに進んでいた。

幼少期こそ物乞い、身売り、脱走を繰り返していたが、どさくさに紛れて尾張と美濃を治める織田家に潜り込む。

世の半ばを手にしていた織田信長も、自分に興味がないと分かると、下克上の手引きをして明智光秀に討たせた。

その光秀も松永久秀に仇討ちさせた。

久秀は織田家を乗っ取り、信長に代わって天下統一を果たす。

自身は久秀との間に儲けた子・秀頼の存在を盾に久秀を説き伏せ、天下の金銀を居城大坂城に集めさせた。

そしてその久秀も亡き者とした。

全ては聚楽の思い通りであった。

（これで世の中の銭はアタシの物）

久秀の亡骸を前に、涙が止まらない。

（金山も銀山もアタシの物。屏風も掛け軸も着物も全部全部アタシの物）

身体に力が入らない。

（天下一のこの大坂城もアタシの物）

銭こそ全て、金こそ至上と信じて生きてきた聚楽。望んでいた物を手に入れた今、しかし聚楽は起ち上がる気力すら失っていた。

（全部アタシが好きなように使えるのね）

久秀と秀頼の三人で散歩した梅林が思い出される。

（アタシの好きなように）

久秀は死ぬまで自分が毒殺されたと気付いてはいなかった。聚楽や家臣達の手を握り、

「秀頼を頼む。秀頼を支えてくれ」

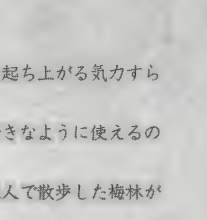
起き上がれない身で懇願していた。

その度に聚楽は、

「任せてちょうだい」

と笑顔で答えていた。

（アタシの、好きなように……）



聚楽は久秀の骸が横たわる布団をめくると、冷たくなった手を取り、力を込めて握りしめる。

久秀の喪が明けると直ぐに聚楽は後継者秀頼の母としての権威を振りかざして中央集権制を押し進め始めた。

検地や、武家以外の市民から武具を召し上げたりは久秀の生前から行われていたが、聚楽は更に全大名へ二年に一度の大坂への参勤を義務づける。

戦乱が終結して数年、領地の配分も確定し、領民を手懐け終えた大名達にとって、いざこれから内政を充実させようという時期での参勤は資金的にも、差配的にも過重な申しつけであった。

最初に叛旗を翻したのは筑前に領地を得た羽柴秀吉の養子・秀次で関東一円を治める徳川家もこれに同調する。

江戸城――

「あーの雌狐め！　大坂城ごと焼き払ってやるんだから！　ねぇタヌキ！」

徳川家康がため息混じりに言う。

「ですから平グモ様、軍を意趣返しに使われては兵らも浮かばれませぬぞ。それとタヌキ呼ばわりはやめて頂きたい」

「だから天下はタヌキにくれてやるって言ってんじゃん！　黙ってあたしの言うこと聞いてりゃいいの！！　あとタヌキはタヌキだから」

散々に怒鳴りつけた後、

「まあでも……」

平グモちゃんは思い改めたのか、うなじを掻き、かぶり物を整える。

「寝取られた恨みもないことはないけど、そんな事はいいんだよ……久ちゃんが生きててくれたんだったら」

唇を噛む平グモちゃん。

「でもあの大坂の雌狐は久ちゃんを毒殺して……」

「証拠はありますまい」

「証拠が見つかる頃には徳川家なんかお取り潰しになってるよ！　それが嫌だからタヌキも話に乗ったんでしょ！」

「それはそうですが」

今更ながら後悔しないでもない家康である。

（危うい御方ではあるが、正信の話では頼りになる御方でもあるらしいし、ここはやはり平グモ様に賭けてみるか？）

秀次を焚きつけたのも平グモちゃんであり、秀次と家康を結びつけたのも平グモちゃんであった。

◆　　　◆

●軍事≦7

秀頼とその供衆・真田大助が大坂城から脱する抜け道へ潜るのを見送ると、聚楽は一人、薙刀を片手に火の手の上がった天守閣へと戻っていく。

家康を盟主と仰ぐ反聚楽勢力は野戦に於いて聚楽派の軍勢を撃破。天下の趨勢は家康へと傾いたが聚楽はそれを認めず、徹底抗戦の支度を始めた。

これを好機とみた平グモちゃんは聚楽との和解の道を探る家康を叱責し、討伐軍を挙げさせる。

久秀恩顧の大名であっても世の流れに逆らう者は少なく、家康勢が大坂城を囲む頃には日ノ本に聚楽派の領地は畿内の一部しか残されていない程であった。

戦は終始、家康方の有利に進み、やがて大坂城内でも聚楽を見限り逃散する者まで現れる。

もはやこれまでと愛息秀頼を逃がしたのはこの様な状況故であった。

聚楽は乱暴狼藉を働く裏切り者を撫で切りにしながら天守最上階へとたどり着く。

「……何これ！　なんにも見えないじゃない！」

あの日、久秀が光秀の謀殺に成功した夜。

安土城から見た城下はどんな宝石よりも輝いて見えた。

末期にもう一度見たいと思って熱気の中を昇って来たが、いざ外を見てみれば、城内到る所から立ち上る黒煙に遮られ、息苦しいばかりで何も見えない。

「…………」

振り返って階段を見れば、階下にまで火が回ったのか、濛々と煙が流れ込んでくる。

「ヤダ。やっぱり死にたくない」

夜景さえ見えていれば聚楽も満足して死を受け入れられたかも知れない。

ところが今は熱く煙い中に一人きり。

「これじゃ今までしてきたことが水の泡じゃない！」

自らの身体を汚し手を汚し、やっと上り詰めたものの、最後の最後で一人では織田家に潜り込む以前に野垂れ死にするのと変わりがないとさえ思えた。

「何とか助かる方法は……」

と、そこで思い直し、

「せめてみんなの目を集める派手な死に方は……」

辺りを見回すがめぼしい物はない。

「火薬とかあれば爆死してやったのに！」

階段から火が吹き上がってきた。

時間がない。

「もーー！　こうなったらー！！」

聚楽は助走をつけて駆け出すと、欄干を踏み台に、黒煙渦巻く夜空へと飛び立った。

～終わり～

おたよりのコーナー

LETTERS & POINTS

ライブ１週間前なーう！　そんなわけで時間もページも（？）キッツキツです。巻いていきましょうー。

○行殺新選組

『祭日とかで活動がお休みの日って無いのですか？』（1446ふ～ちゃん）1+2p

「土道は年中無休２４時間営業です。冗談はともかく、当時は月に３日も休めればいい方です。新選組は最先端のブラック企業ですね！」

【たたら】

○ろり巨乳スレ

『タコ軍曹は、今の時期どうやって食べるのがオススメですか？』

（1674カナエ一号）1+2p

「全身に生クリームを塗りたくってペロリペロリと優しく舐めとってあげるのは如何でしょう。仄かな磯の香りのいい出汁出てると思います。何度でも使えるし」　【せんばた楼】

『「ろりVS巨乳VSスレンダー　千年戦争」、いつも楽しく読ませていただいています。てゆーかすげーな「浮力」陣営！　いや、陣営ではなくコーナーですけど、もうそれくらいの勢いがおりますね。しかして巨乳だけが浮力の影響をうけていいものか！　ここはズバリ、水に塩をたっぷり入れて、ロリもスレンダーでも浮ける、塩風呂にすれば浮力格差もなくなり、全おっぱいに幸福がー！（それもう風呂じゃなくて、死海や）』

（1087アンドリュー）1+2p

「Ｅカップ以上の本気の女子水泳競技というのがあればいいと思いますオリンピック。浮力をいかに泳ぎに生かすか、世界のスポーツ界に革命おきますよねおきませんか無理ですかポロリもあれば芸術点つけます」　【せんばた楼】

○蒼天のセレナリア

『フル装備すぎるコニー、見た目の迫力とは裏腹なセリフがなんとも言えません。季節の変わり目は毛が生え変わったりいろいろ飛んだりで、苦労している存在が他にもいそうです。現代日本ではなかなか出来ない格好ですが、アレルギー持ち的にはちょっと羨ましかったり。コニースタイルとして流行したら是非やってみたい』

（0674カナエ一号）1+3p

「わたしもアレルギーがあるので、前号のコニーにはなるほど感満載でした…！　あのスタイル、さりげなくスチームパンク王道の格好のようでもあり、防御力と共に憧れます…」【桜井】

『うわーセレナリアの漫画を読むことが出来るとは！子供たちに慕われまくりなコニーさん羨ましい…。マスク下のコニーさんの顔をぜひ拝見したいです（笑）』　　（3667しの）1+3p

「絶対！　絶対誰にも見せられませんっ。だめー！」　【コニー】

○漆黒のシャルノス

『シャルノス版のワトソンさんが読めて感激でした！　シャーロックホームズ シャドウゲームの観賞効果もあって、シャルノス版ホームズとワトソンはどんな風に冒険してるのかなあと想像が膨らみます。ソナーニルWEBノベルで触れていたメアリの近況が読めて嬉しかったです。どういう経緯でそうなったのか気になっていたので。人手が増えた後がにぎやかそうで、続きが楽しみです！』　　（3084ニコ）1+3p

「すみません、人手が増えて…の更に後の時間軸になってしまいましたっ。メアリのこれからについては、AKIRAさんと相談しながら考えています。果たしてどんな風に…」　【桜井】

『つい先日クリアいたしました。メアリがすんごくかっこよかったです…！　チャーチルのお話は切なくて切なくて…泣いちゃいそうになりました』　　（3885みみっく）1+3p

「ありがとうございます！　WEBノベルなども併せて、どうかお楽しみいただければ幸いです。そして実は…先日発売させていただいたファンディスク『Steampunk Full-voice Fandisk』には、チャーチルとヴァイオラのエピソードが…」【桜井】

○紅殻町博物誌

『白子の想いを桜が拾い上げ、彼の傍にそっと降ろしたような、和の持つ妖しさや心を感じた一時でした。桜に人々が魅了され、様々な意味を持たせるのも分かる気がします。手紙に想いをのせる事によって、己自身が浮き彫りになり、それを直視し届けられずにいる白子の心中が伝わってきました。桜の花弁を滑らせ、大胆ながらどこか控えめなイラストにも、見る者全てを引き込むような魅力を感じてうっとりしています』

（0674カナエ一号）1+3p

「古来より桜は日本人にとって、聖性と魔性を併せ持つ花であり、そしてこれからもそうあって欲しく思います。そして夜桜、着崩した衣装、長い黒髪の美少女という取り合わせはいわば一つの必勝パターンですね」　【希】

『古風で優美な文面に古きを愛し重んじる白子の想いを感じ、それ故に間違いを不安がる気持ち、すごく共感いたしました。しかしこの手紙を受け取って誰が押し付けがましくなど思えましょうか！宮里さんもすぐにでも手帳を開いて紅殻町に行けるよう予定を組むに違いありません！

昨今では逆に解釈されますが、さすがの白子さん。古くにある様にその想いの強さで相手に自分の夢をみさせるのですね…。また是非他のキャラクター達の手紙も読んでみたいです！』

（3667しの）1+3p

「手紙の書き方一つにも、作法や伝統にこだわるのが白子ですが、でもだからこそかえって、その「あくがれいづる魂」は、あのような妖しい蠱惑的な姿をとるのでしょう」　【希】

○信天翁航海録

『「臍を噛む」とか「甑」とか普段使わない文章や単語を使う事によりゲームに見合った、ふいんき(←なぜか変換できない)が有り、独特の世界観が楽しめて嬉しいです。言葉って面白いですよね！』　（1446ふ～ちゃん）1+3p

「本当に、言葉、文章というのは魔物だと思います。書き手と言葉、本当はどちらがどちらを操っているのか…そう想う事もしばしばです」【希】

『やだ……この二人（相変わらず）ひどい……、スカラーX装備の人可哀想……』

（3680竜宮）1+3p

「あのＭＨ世界の住人は、しょっちゅう苛酷な目に遭っているのできっと大丈夫！（の筈）…まあスカラーXガールは、ハンターに対してろくでもない口ばかり聞いているので、天罰でも下ったんですよ」　【希】

○どすこい！女雪相撲

『オリンピックみたいに女雪相撲の歴史も、一昔前はけっこうありえない感じだったのかなとか想像しています。頭があがらない梅とマイさんのイラストも、態度から梅の可愛さがアップしてこのペアがより好きになりました！』

（0674カナエ一号）1+2p

「江戸時代では新参舞いと並ぶイジメの一つにもなっていたはずです。大奥の派閥争いも女雪相撲の結果で決めたりしていました」　【岩清水】

『スポコン物や熱血系バトル物にならい劣勢になった侘助が能力を開花させて必殺技→勝利ですね』　　（3229雪あとむ）1+2p

「今回、侘助が必殺技を会得しましたが如何だったでしょうか！」　【岩清水】

○紫影のソナーニル

『連載いつも楽しみにしております。毎回リリィちゃんが可愛すぎて人生が楽しいです』

（3580ささめけ）1+3p



「素敵なリリィをありがとうございます。かわいいぃ～！　わたしも可愛さにあてられてしまいました…これは、かわいい←→かわいいの織りなす無限機関！」　　　　　　　【桜井】

『自分から率先してお勉強するリリィ可愛い。あと5分といいつつ30分意固地になって頑張っちゃうリリィ可愛い。こうしてエリシアさんの様に立派なレディになっていくんですね』

（3192トリスメギストス）1+3p

「そ、そうです。多分エリシアの若い頃も、似たような感じだったはずで…」　　　【桜井】

『物語を楽しむというのは、心の余裕がないとできない事ですよね。若しくは、その余地を持とうとする意欲がないと。知識だけでなく、物語を楽しむ事と楽しんでいた過去を思い出したエリシアさんには、心の余裕ができてきた事。そして。読み聞かせて貰う所から一歩進んで、自力で興味と知識と向き合おうと頑張るリリィの成長ぶり。それでも見つけれなかったら…と望む所に愛があるなと、微笑ましかったです。二人の読書へのスタンスと心境の変化が喜ばしくて、とても胸が暖まる思いでした。良き読書を！』　　　　（4071猫目紅玉）1+3p

「素敵な言葉をありがとうございます。良き読書を。今年こそは秋が訪れることを祈りつつ…」

【桜井】

○花散峪山人考

『「やばいよ……やばいって。鈴ちゃん、S、F（すごい、ふしだら）だよ……」と言うように、秋生少年とシンクロさせてもらいました。ああッ！　自分も鈴ちゃんに「ん」と指を咥えられて「れるれる」されたい。が、鈴ちゃんの行方は知れないので、代わりに鈴子ちゃん（花散峪山人考）に会うべくショップに行ってきまッす！』　　　　（3947セトの教授）1+3p

「鈴、それは少女趣味と人形嗜好を組み合わせたまったく新しい…っ（新しくはない）。いやはや、中学時分という思春期での天野可淡の人形写真集との出逢いは、確実に希の中の暗い扉の一つを開けてしまった訳ですよ」　　　【希】

○屋上の百合霊さん

『阿野ルートなかったんで……阿野藤主人公視点で結奈を攻略する話が見たいです！　幽霊が見える→結奈を幽霊から助ける　みたいなifルートとかぜんぜん違ってもいいんですが（チラッ』

（3789B.B.）1+3p

「実は阿野さん、初期プロットでは敷地内にある稲荷社の狐姉さんと交流があったりしたんですよ。ifではない彼女の物語をやりたい野望は持ち続けてます（チラッ」　　　【とい天津】

○平グモちゃん

『ノブリンのあまりのプリチーさにメロメロ（死語）です。ぜひ何かの機会にはノブリン&茄子たんマスコットを…！』

（2352みぐら）1+4p

「私としては是非ねんどろいど化して欲しいです！　でも久秀ならドルフィードリームでもいけそうな気が！？」　　　【岩清水】

『体験版をやっている最中で薄々気付いていました。こいつぁ愛すべきバカゲーだと……！　と、いうことで限定版買いました！　ちぇけら！』

（4099夢幻）1+4p

「ありがとうございます！　布教用に通常版を買い足すのも良いかと存じ奉り候！　名古屋は外郎、ノブリン三郎！　みんなで平グモちゃんやろう！　ちぇけら！」　　　【岩清水】

○その他コーナー（個人宛など）

『スチパンシリーズポータルサイトにてスチパン第６弾が発売することを知り、また桜井さんの秀逸なストーリー、美麗なビジュアルを堪能できるのかと狂喜。そのおかげでキーボードが逝ってしまったのは、今では良い思い出です（笑）　兎にも角にも凄く期待しています！』

（4099夢幻）1+3p

「ひえぇ、恐縮です…！　新作もお楽しみいただければ何よりの幸いです。新しくできたポータルサイト共々、よろしくお願いいたします。そして、ああっ、キーボード…新しいものが長持ちされますように…！」　　　【桜井】

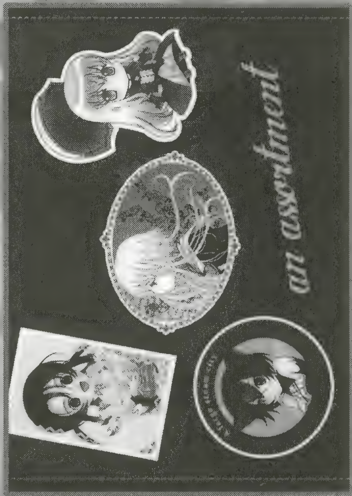
『会報にに載っている短編がまとめられることは、ありますか？特に、スチームパンクシリーズの短編を冊子で読みたいのです』

（3753木村）1+3p

「ありがとうございます。今回の『Steampunk Full-voice Fandisk』のようなADVでの形とも異なる、本の形でまとめることも視野に入れています。どうか、お楽しみにお待ちいただければ幸いです」　　　【桜井】

夏コミ同人誌&グッズお送りいただきました！

実は滅多に，オフィシャル宛てに本が届かないので嬉しいです……！





タイトル：「an assorment」
発行：すちーむパン
ページ数：46p（本文40p）
装丁：B5オフセット／表紙フルカラー
ノベルティ：ステッカーシール４枚
頒布価格：４００円
内容：スチームパンクシリーズの二次創作合同誌です。



タイトル：「リリィ携帯クリーナー」
発行：森イツキ
形態：フルカラー35mm×35mm
頒布価格：２００円
内容：紫影のソナーニル、リリィの二次創作グッズです。

入手方法：ただ今在庫がありません。9月中旬頃～下記ＵＲＬから自家通販を開始予定です。
http://luceblu3.blog.fc2.com/

「たくさんの『好き』が詰まった豪華な一冊！　スチームパンク・シリーズの全作品を題材にしていただいています。どのページも素敵です。可愛くて、楽しくて、美しくて、そして時に切なくもあって……時間を忘れて読み耽ってしまいました。更に、何と素敵なグッズもたくさんあって、感激し通しです。きらきらです！　ありがとうございます！」　【桜井】

他にも夏コミではたくさんのライアー同人誌を出してくださったサークル様があったようです。ありがとうございます！　桜井からお礼です。

「今年の夏コミでも、沢山のスチパン同人誌を拝見させていただきました。本当にありがとうございます。いただいた『好き』のパワー、今後の作品づくりのパワーにさせていただきますね」　【桜井】

ホント、感想もですけどこうした二次創作がどれだけ作り手に喜びと創作意欲を与えてくださることか……。是非これからも本やグッズを作ってみたくなるようなゲームを用意できるよう、頑張ります！

では残りスペースの許す限りその他投稿を～。もうポイントがweb掲載なのはデフォルトです。人数増えてここに載せきれないってのもありますけど。

『ロットアップ作品の7対応版パッケージなどは出たりはしないでしょうか？　（具体的に言うならフォレストと腐り姫）DL版があるじゃない、というのは最もなのですが、やはりパッケージ版が欲しいのです……』
（3838くたばりかけの梟）1+3p
ある程度以上古いゲームは７で動かせるようにするにあたり大変な労力がかかる「かも」と言う事情もありますが（ライアーのプログラムは一方通行の進化を遂げていたりするのです、たまに）、実際はパッケージ化するに当たってそれだけの纏まった数を店舗様が買っていただけるかどうかというのが大きいですね～。いっそ特定店舗専売商品みたいな感じで出すのが手っ取り早いかもしれませんね。むむ、そのうち……。

『そういえばライブの他のメーカーとの違いでliarさんだけカラオケ配信がない･･･ということは！？期待してもいいんでしょうか？むしろお願いします！！』　（3789B.B.）1+3p
いまいち今のカラオケ配信システムを理解できていないのですが、メーカーさんのページで投票を行ってある程度集まれば入る仕組みなんですかね？　私もカラオケでSalvatore!とか濛々たる黒煙は咲きとか歌いたい…！　今回の悪巧み相手、イノグレさんがカラオケは言ってたはずなので、この機会にいろいろヒアリングしてみますー。気長にお待ちください…。

『B.G.M fes非常に楽しみです！ライブサイトでのライアーソフトの紹介文に色々吹いてしまいましたwカルト的人気…！Σ（°°*）　イノグレさんとのコラボもあるようでわくわくして当日を待っておりますー！』
（3667しの）1+3p
カルトですみませんw　ＢＧＭはスチパンライブとは違う意味で全力投球の完全燃焼モード！　冒頭にも書きましたが、これの入稿してる今、ライブの１週間前なのですよね…。あらかた準備は終わっておりますが、当日迎えるまではどきどきです。さて、皆様に楽しんでいただけましたでしょうか？　是非感想お聞かせください！

『BGM fesはライアーソフトの参加が決まった瞬間に参加が決定していたわけですがRitaさんまで出てくるとかこれもうどうしたらいいんでしょ…？　BGMということは作中BGMでありそしてRitaさんが歌ってるAA愛！が来るはず……よーかのコスプレで歌いたいと呟いていたので…期待…してもいいんですよね…？　そして個人的ライアーの歌ことうそつきの歌こと「apoptosis」も聞きたいです！　まだライブで歌った事がないはずなんでこの機会に聴けるといいなーとかもう楽しみすぎてたまりません！　まずはチケット取るところからのスタートだ…』
（3354グアゼ）1+3p
BGMって「美少女ゲームミュージック」の略なんですよね。私も「びしょゲーメーカーです」なんて言ったこと無いんで最初分かりませんでしたｗ　読む時はもうライブ終わったのでネタバレしちゃいますけどＡＡ愛！やりましたなー！　これは今回のライブ決まってすぐにやりたいと思いました。そしてメドレーパートでは「濛々たる黒煙は咲き」。オリジナルではありませんが面白いアレンジだったと思いますし、何よりあの台詞を霜月はるかさんが言うなんて…！　ファンの方ごめんなさいー。

そんなライブの新曲＆演奏曲がまるっと聴けるＣＤ『隻眼のティンダロス』は近日ライアー公式でも通販開始予定です！　買ってね！（宣伝）

『ぱっと開いてみて文字数が多かったらだいたい希さんの担当箇所』　（3229雪あとむ）1+3p
正確には、桜井以外全員、分量無視してくるんですけどね…（涙）。

『投稿するようになってから会報がもっと楽しくなったので、こんなことならあのコーナーやあのコーナーが終了する前にやっていれば…！とひどく後悔しています。プチ復活やプチ特集なんて無理ですか？』（2352みぐら）1+3p
投稿ってちょっとめんどくさいしハードルありますけど、一度しちゃうとどんどん楽しくなりだしますよね。終わったコーナーの復活は基本、ありませんが、「＊周年」とかそういうタイミングでツボを突いた投稿があったら、ライターの心が動くかもしれませんよ…！　ちなみに投稿ポイント交換の「コーナージャック」は終わったコーナーにも有効という話…（ライターや絵師さんの都合で実現しない可能性はあります、あしからずー）

○投稿お待ちしております！
次号もよろしくお願いします！　同人誌やイラストも待ってますよ～。

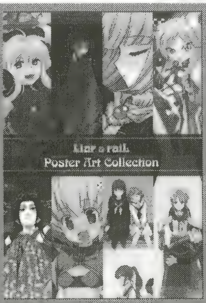


[ドラマCD　Steampunk Quintet]

セレナリアからソナーニルまで、５作品・５本のドラマＣＤをすべて新録でお届け！　シリーズファン必携の盛りだくさんなＣＤです！

通販価格　2,000円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料３００円を追加でご入金ください。他のグッズ・ソフトと一緒のお申し込みや、宅急便配送希望の方は右下の送料をお支払いくださいませ。



[Liar&raiL Poster Book]

歴代ポスターアートをロゴ・文字抜きで大判で楽しめる決定版コレクターズアイテム！

通販価格　1,500円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料３００円を追加でご入金ください。他のグッズ・ソフトと一緒のお申し込みや、宅急便配送希望の方は右下の送料をお支払いくださいませ。



[英訳ガイド　The Rough Guide to STEAMPUNK WORLD]

フランスで開催された「ＪＡＰＡＮＥＸＰＯ」に出展した、海外向けスチームパンクシリーズガイドブック。対訳ですので、慣れ親しんだシリーズの世界観を英語でお楽しみいただける、逆輸入グッズです！

通販価格　1,000円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料３００円を追加でご入金ください。他のグッズ・ソフトと一緒のお申し込みや、宅急便配送希望の方は右下の送料をお支払いくださいませ。



[レイル文庫最新刊　星継駅擾乱譚]

従来のレイル文庫とは異なり、完全書き下ろしでお届けする、希、最新作の外伝ノベル！

通販価格　500円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料３００円を追加でご入金ください。他のグッズ・ソフトと一緒のお申し込みや、宅急便配送希望の方は右下の送料をお支払いくださいませ。

[蒼天のセレナリア・ザ・ガイド]



破格の濃度！現在唯一のスチームパンクシリーズ作品単体ガイドブック！

通販価格１８００円（税込）

※単品注文の場合、メール便での発送可能。送料３００円をお支払いください。

[salute!]



ライアー初のボーカルコレクション！勿論、全曲Ｒｉｔａさん歌唱！

通販価格３０００円（税込）

※単品注文の場合、メール便での発送可能。送料３００円をお支払いください。



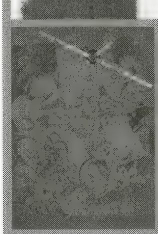
スチームパンクシリーズ５周年記念ＣＤ

[ricordo]

この５年間の軌跡を、音楽を通じて辿るメモリアルＣＤ。シリーズ全ＯＰ・ＥＤの他、このＣＤの為にアレンジ・新録したボーカル曲を追加してお届けします。また、ジャケット・ブックレットは、皆様と一緒にこの５年の足跡を辿る旅に出るというテーマで、ふんだんに写真を撮り下ろしました。

通販価格　2,500円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料３００円を追加でご入金ください。※ＦＣ通販でお求めいただきますと、もれなくカラオケデータや、年末ライブの映像・ドラマなどを収録した特典ＲＯＭをプレゼント！



スチームパンクシリーズ５周年記念冊子

[memorial book]

「紫影のソナーニル」で発売日カウントダウンを飾った美麗なイラスト群。実は多くのデータが、もっと大きなサイズのビジュアルとして存在しています。それらをフルカラーで一挙掲載の他、ＢｕｇＢｕｇ誌で好評連載中の「蒸発僭機」からインガノック編、シャルノス編、ヴァルーシア編を完全収録＆桜井の書き下ろしコメントを追記！　更にライブを彩る展示物の紹介やＣＤジャケットの撮影風景など、盛りだくさんの内容でお届けします！

通販価格　1,000円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。
送料３００円を追加でご入金ください。



[ライブ開催記念タオル]

ライブロゴと歯車をデザインしたマイクロファイバータオルです。

通販価格　500円（税込）

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。
送料３００円を追加でご入金ください。

USO. BACKNUMBER

1冊４００円（税込・送料込）



GAMESOFT

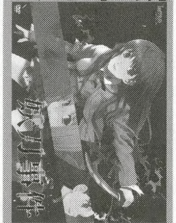
第25弾『水スペ川野ロノブ探検隊』までの作品、及びレイル第1弾『霞外籠逗留記』は販売を終了いたしました。 現在、追加生産・通販は行っておりません。一部タイトルは弊社HPよりDL販売しております。『妖刀事件』は市場販売を終了いたしました。同タイトルはDL販売を予定しておりませんが、FC通販では今後もお求めいただけます。「紅殻町博物誌」は近日販売を終了しDL販売に移行いたします。『FD3読参子育成計画』はファンクラブ通販のみの限定商品となり、現生産数のみで販売終了となります。

『FD3読参子育成計画』



2004年11月発売
通販価格 2,000円（送料込）

『妖刀事件』



2006年10月発売
通販価格 6,800円／7,400円（※1）

『Round a Go! Go!』



2007年7月発売
通販価格 5,400円（※2）

『紅殻町博物誌』



2009年7月発売
通販価格 7,040円（※3）

『白光のヴァルーシア』



2009年11月発売
通販価格 7,040円（※4）

『どすこい！女雪相撲』



2010年3月発売
通販価格 7,040円（※5）

『信天翁航海録』



2010年7月発売
通販価格 7,040円（※6）

『紫影のソナーニル』



2010年11月発売
通販価格 7,040円（※7）

『ハチポチ』



2011年3月発売
通販価格 7,040円（※8）

『オイランルージュ』



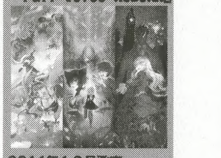
2011年7月発売
通販価格 7,040円（※9）

『花散峪山人考』



2011年11月発売
通販価格 7,040円（※10）

『Steampunk Full-voice ReBORN』



2011年12月発売
通販価格 各3,000円（※11）

『屋上の百合霊さん』



2012年3月発売
通販価格 7,040円（※12）

『平グモちゃん』



2012年7月発売
通販価格 7,040円（※13）

通販特典

※1：『書き下ろしNETRIDEカード』付き7400円（NETRIDEカードはダウンロード販売にご利用いただける金券です。不要の方は6800円で本体のみお求めいただけます）／※2：卓上カレンダー付き（カレンダーはソフト発売当時の物ですので、今は実用いただけません）／※3：おまけシナリオCD「人見十湖のG級ソロ日記」付き／※4：おまけシナリオCD「それは、彼女達の幕間」付き／※5：おまけシナリオCD「胸がドキドキ宇宙場所体験」付き／※6：特典冊子「信天翁航海録流出版」付き／※7：おまけシナリオCD「幾つかの、冴えたやり方」付き／※8：特典冊子「月刊うそ特別号」付き／※9：特典ROM「ある大紋日の高瀬屋」付き／※10：特典CD「レイルソフトサウンドトラック」付き／※11：スタッフ同人誌「スチパントリビュート」付き／※12：FCスペシャルドラマCD「新しくこの学園に来たあなた達に」付き／※13：「平グモちゃんペーパークラフトデータROM」付き

▼一部、限定特典の在庫確認はメールにてお願いいたします。



最新作！

過去のスチームパンク・シリーズにおいて発表した多数のアペンドシナリオ及びファンクラブ用シナリオなど全9編を男女フルボイスにて収録。更に、完全新規書き下ろしシナリオに、FC会報で掲載した人気長編小説「ザントウの深緑」などを原作とした書き下ろしの外伝シナリオを合計7編収録！ FC会員は更に限定シナリオをHPからダウンロード可能！ 最新作「黄雷のガクトゥーン」の先行ティザームービーも収録した豪華ファンディスクです！

Steampunk Full-voice Fandisk

2012年8月発売 通販価格 3,000円

※こちらの商品にはFC通販特典として桜井光書き下ろしノベルペーパーが付いてきます。

■ヤマト便送料

下記に該当しない地区	640円
関西地区　北東北地区	740円
中国地区	850円
四国地区	950円
北海道　九州地区	1060円
沖縄地区	1260円

◎通信販売について

グッズ・ソフトには郵便振替，銀行振込，現金書留，**ヤマト便代引**がご利用いただけます。

①郵便振替の場合

00140－1－600184
加入者名　㈱ビジネスパートナー

※通信欄に希望商品名・配達希望曜日／時間をお書きください。氏名・住所・TELもお忘れなく！

②銀行振込の場合

みずほ銀行新宿支店（普）5431181
加入者名　㈱ビジネスパートナー

※入金後，控えをFAXまたは郵送で弊社までお送りださい。その際，住所・氏名・TEL・ご希望の　商品名・ご希望の配達曜日／時間をお書き添えください。

【控えの送り先】（FAX）03－3355－6736
（郵送）奥付の住所へ「通販」係宛に

③現金書留の場合

※奥付の住所まで，代金をお送りください。
封筒内に氏名・住所・TEL・ご希望の商品名，ご希望の配達曜日／時間をお書き添えください。

④ヤマト便代引きの場合

※ホームページの**「代引き申し込みフォーム」**より，ご希望の商品をご予約ください。折り返し，注文確認メールをお送りします。お申し込み内容に間違いない場合は，1～2週間前後でお送りしますので，お受け取り時に代金をお支払いください。お申し込み内容に間違いがある場合，キャンセルする場合は急ぎ3日以内にその旨メールにてお知らせください。

※代引き以外でのご注文時，メール便でお送りできない荷物につきましては，左の送料を追加でご入金いただくか，着払いでのお受け取りとなります。

※FC会報・ファンディスクの価格は送料込みです。単体でのご注文時はメール便でお送りします。他のアイテムと一緒にお申し込みいただいた場合は着払いでお送りいたします。



投稿者名／竜宮さんのトピックスネタ《今日のお天気は晴れ、所により久秀爆発となるでしょう》採用させていただきました!

ライアースタッフQ&A

第4回「希」企画者・ライター

「希さんにとってお酒とは？」カナエ一号さん／「あの－、お酒好きなんですよね？」ふーちゃんさん／「酒を飲むと執筆に興がのりますか？　それとも、支障をきたしますか？」ニコさん

好きとか嫌いとかを通り越し、水や空気と同じ必要不可欠なものです。もちろんインスピレーションを与えてくれるものでもありますが、希は程々に抑えるという事を知らない莫迦なので、呑みながらの執筆は出来ません。

「執筆速度はどれくらいですか？　平均と、これまでの最高、両方教えていただけると幸いです」アンドリューさん

希は基本的に遅筆でその上速度にブレがあるというどうしようもない型なので、平均を取ると目も当てられないことになります。最高では一日で４００字詰め原稿用紙換算で８８枚くらいを記憶していますが、ただしその後数日は使い物にならなくなりました。

「希さんのむせ返るような色気を放つ濃密な文章に圧倒されます。どのようにしてこうした文章が出来上がったのでしょうか？」日下部峰雪さん

とっても光栄なご評価ですが、ただ自分の中の業（カルマ）と欲求に従ったからとしか……もちろん好きな作家の影響もありますが。

「おすすめの小説や漫画はありますか？」みぐらさん

昔のものは枚挙に暇がありませんが、比較的最近のものならば、漫画：「パラダイスバード」佐藤明機、小説：「アメリカン・ゴッズ」ニール・ゲイマンあたりを。

「モンハン以外でお好きなゲームが知りたいです！」ささめけさん

タクティクス・オウガ（ＳＦＣ）、川のぬし釣り２（ＳＦＣ）、侍魂天草降臨（ＮＥＯＧＥＯ）、旧版クトゥルフの呼び声（ＴＲＰＧ）、Ｍ：ＴＧ（ＴＣＧ）等々。

「他社のエロゲーで好きな作品は？」くたばりかけの梟さん

「ようこそシネマハウスへ」：ＨＡＲＤ、「ｑｕａｄｒａｎｔ」：ｉｎｓｐｉｒｅ…好きというより、忘れられない作品です。いずれもＤＯＳゲー時代のもので、現在ではプレイはほぼ不可能でしょう。

あーやっぱり入らん！　続きはｗｅｂで！

※質問をお送りいただいた皆様に３ｐ、採用者には５ｐを差し上げます。次回はメガネ好きとヤキソバでおなじみグラフィックチーフのしまさらゆめきへの質問お待ちしておりますー。

【編集後記】コミケにライブにと大忙しなライアー夏の陣一段落です■いや、投稿コーナーに書きましたとおり今はライブ直前なんですけど■しかもぼっち残業ですけど■フフフフ（涙）■そんなライブも終わり（終わったの！）いよいよ皆様待ちに待ちましたか？スチパン最新作へスパートです！■体験版やムービーも近々お届けしますのでお楽しみに！■あそうだ！■すみません読者参加企画ですが続きはＷＥＢでねとさせていただきます■そして更にすみません■４０号掲載分の投稿ですが■平グモ修羅場中にやんばるのＰＣが壊れリカバー不能に…■改めて同内容で投稿募集します申し訳ございません■その代わりポイントは２倍発行します■詳細は会報到着前後更新のＦＣサイトをご確認くださいませ■では冬へ向けてスタッフ一同突っ走りますー！■また次号！！

会員専用ホームページ ※ＵＲＬが変わりました！
http://www.liar.co.jp/cgi-bin/gate/gate.cgi
ＩＤ：member　pass：uso800
壁紙データ、専用ボイスなどがダウンロードできます。

ライアーソフトファンクラブ会報
『月刊うそ。』第42号
年4回季刊発行　2012年9月25日発行

発行：（株）ビジネスパートナー　ライアーソフト
編集：山原久稲　表紙レイアウト：しまさらゆめき
表紙・巻末漫画：Ｌｅｍ　印刷：（有）あかつき印刷

《お便りの宛先》
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-25-3
エクセルコート新宿301
FAX.03-3355-6736
e-mail fc@liar.co.jp
※会員ページの投稿フォームもご利用ください。
各投稿には『ＦＣ投稿・●●係』とコーナー名を明記してください。
第43号の掲載〆切は11月12日（月）必着！

次号会報４３号は年明け１月刊行予定。発売直後のガクトゥーン情報をはじめ、冬の＊＊＊もあるの！？　スチパンが＊＊＊に！？　いろいろお届けしますー。

ライアーソフトファンクラブ会報『月刊うそ。』



ドラマCD
「Steampunk Quintet」



フルボイスファンディスク
「Steampunk Full-voice Fandisk」

夏コミグッズ通販開始!!



英訳ワールドガイド
「The Rough Guide to STEAMPUNK WORLD」



ポスターアート集
「Liar&raiL Poster Art Collection」



レイル文庫新作
「星継駅擾乱譚外伝小説『雨ヶ森去来抄』」

二〇一二年〇九月二五日発行 年四回季刊発行
(株)ビジネスパートナー ライアーソフト